

〔資料〕

滋賀県
日野町 信楽院大松寺所蔵木食澄禪上人関係資料

関口 静雄

【解題】

滋賀県蒲生郡日野町村井に所在する浄土宗仏智山信楽院大松寺所蔵の木食澄禪上人関係資料を紹介する。同寺は蒲生家菩提所信楽院の通称で知られる。鎌倉時代から安土桃山時代にこの地方を統治していた近江蒲生氏の菩提寺であるからで、貞和五年（一三四九）蒲生家第九代将監高秀が信楽庄牧にあった紫香楽寺の本尊阿弥陀如来像を小御門城の馬場に小堂を建てて安置したのが始まりと伝え、明応七年（一四九八）十四代貞秀が音羽城内に移し、近江浄土教団の本拠であった金勝山阿弥陀寺の嚴誉宗真を迎えて中興開山し仏智山信楽院を称した。その後文亀四年（一五〇四）十七代定秀が中野城内に移築し、定秀隠居時に現在地に移された。しかし十九代氏郷が天正十二年（一五八四）伊勢松阪に、さらに同十八年会津に転封されると次第に寺勢が衰え、これを憂えた日野在の蒲生氏旧臣が会津の二十代秀行に懇請し、慶長十二年（一六〇七）に再建したという。現在の本堂は元文三年（一七三八）の改築で、天井一面には当寺を菩提寺とする高田法眼敬輔の雲龍図が描かれている。なお、信楽院を開基した十四代貞秀は浄土宗に帰依し、五十二歳のとき出家して智閑と号し、嚴誉宗真が文明十六年（一四八四）に京都知恩院御影堂の法然上人像を修理したとき大施主となった。連歌師の宗祇らと交流し、歌人としても『新撰菟玖波集』に五首が入集し、『蒲生貞秀詠草』『貞秀朝臣集』がある。戒名は信楽院殿大式法眼智閑大徳。墓は信楽院にある。

澄禪上人について、大正九年（一九二〇）二月、上人二百回忌に際して澄禪庵主小西暢道が著した『澄禪上人略伝』に「澄禪上人の如きは、日課

念佛十萬聲、晝宵孜々として他業なし。嚴栖茆廬三十六年、既に三昧を發得し、神仙を友とし龍鬼を化す。以て龜鑑となすにたれり」といい、銀碗鏡無徳は安政二年（一八五五）に上梓した『口稱百萬聲起之記』に、法然上人の一枚起請文の教えを体現し百万遍念仏を行ずる人の第一に澄禪を挙げ、「なん行念仏自力しゆ行にて日課真讀十万十五万しやう也」、「ステニ和尚平世行せきふしぎにして、法道仙人ときくきたりて法話し玉ひ、天人龍鬼つねにきへしてかたちあらはす。甘ねんふする事なくねむることなし。昼夜に十万称浄土の依正こゝろにしたがうてつねにおかみ玉ふと也」と伝える。これによっても澄禪が山林に隠遁抖擻する持律堅固の木食行者であり、稀代の念仏行者であったと知れる。

澄禪上人の伝記として、次の各伝がすでに知られている。

- ①『瑞華澄禪和尚小傳』信楽院靈岳編、享保七年（一七二二）成。
- ②『澄禪和尚行狀記』中川常宇編、三卷三冊、享保八年（一七二三）刊。
- ③『澄禪和尚行狀記遺事』法泉寺珂然編、享保八年成、右②に付。
- ④『續澄禪和尚行狀記』阿彌陀寺信阿編、一冊、寛政五年（一七九三）成。
- ⑤『續澄禪上人行狀記又續』大聖寺謙阿編、寛政五年成。
- ⑥『城州大原山沙門澄禪傳』道契編『續日本高僧傳』、慶応三年（一八六七）刊。

⑦『澄禪上人略傳』澄禪庵小西暢道著、大正九年（一九二〇）刊。

⑧『澄禪上人絵詞全傳』（写本、一冊、澄禪律院蔵）

なお、柴田六五郎氏は上人寂後二六一年を記念して『復澄禪和尚行狀記上中下並續』（昭和五七年二月、南無山房）を上梓し、②常宇編『澄禪和尚行狀記』③珂然編『澄禪和尚行狀記遺事』④信阿編『續澄禪和尚行狀記』⑤謙

阿編『續澄禪上人行狀記又續』の影印・翻刻、①靈岳編『瑞華澄禪和尚小傳』の翻刻を収められた。

右の外にも澄禪伝が存する。信楽院所蔵の二点と、これに付して宮島コレクション所蔵資料一点を紹介する。なお翻刻に当っては原文の表記を尊重し、誤字・宛字等そのままに翻刻した。

④『澄善和尚御影傳』

箱書「澄善和尚御影傳」。絹本掛軸装一幅。画面縦一四一糎・横八六糎、全体縦一二〇糎・横一〇〇糎。澄禪上人の一生を描いた行狀絵伝で三八場面から成り、場面ごとに小題詞が付記されている。場面30「中川常有請于洛北古知谷」には、上人に帰依して妻娘とともに剃髪弟子となり、上人を彈誓上人ゆかりの洛北古知谷阿弥陀寺に請待し、上人没後、『澄禪和尚行狀記』を編じた京都の豪商中川常居士の後姿が描かれていて興味深い。なお常宇は鞍馬寺の融通念仏会再興、伊勢松阪清光寺の念仏会十万人講流布に尽力した人物である。

掛幅画面右下に「文化五年^{戊辰}三月^{高田法眼敬輔外孫}止齋谷輔長製画」とあって、これが文化五年（一八〇八）三月、日野在の谷田輔長（二七四八〜一八二五）六十一歳の作であると知れる。輔長は高田敬輔（一六七四〜一七五六）の三男で薬種雑貨商の谷田家を継いだ保高の嫡男。即ち敬輔の外孫で伯修と号し、止齋・平子齋・篠川などと称し、作品にしばしば谷輔長と署名した。絵を親戚筋の高田敬徳に学び、絵より学問を好んで仁正寺藩医西生懷忠とともに『蒲生旧跡考』十二巻を著し、また祖父敬輔の画業を顕彰して『敬輔画譜』を上梓した。日野町村井の綿向神社に『馬見岡綿向神社板地著色綿向神社祭礼渡御図』、大字西明寺の本通寺に『紙本著色蓮如上人御隠棲絵伝』など輔長の作が伝えられている。また信楽院所蔵『徳本上人四十九歳壽像』は、輔長の描いた徳本上人肖像に上人自筆の六字名号が添えられたもので、画面下左右に「上人四十九歳平子山瑞華莽安座壽像／文化三年丙寅正月七日上人奉尊意於座前圖之谷輔長^印」と記されている。

⑤『澄禪上人繪傳記 段付 全』

袋綴装一冊、墨付二十一丁。表紙題簽に「澄禪上人繪傳記 段付 全」、

内題に「澄禪上人繪傳記 段付」とある。著者等不明であるが、④『澄善和尚御影傳』の絵解台本と考えられる。また上記の澄禪伝⑧『澄禪上人繪詞全傳』（澄禪律院蔵、未見）の底本はおそらく本書であろう。なお影印と翻刻文を紹介するが、写真は平成十六年三月に撮影したもので、撮影技術の稚拙さから巻尾二丁余に記された「澄禪上人年代」（年譜）を欠いている。海容されたい。

◎『進誓上人澄禪大和尚錄記 中』

写本。袋綴装一冊。墨付七十二丁。表紙題簽に「進誓上人澄禪大和尚錄記 中」、内題に「南天山蓮忝菴精蓮社進誓上人澄禪大和尚錄記 卷ノ中」とある。おそらく上中下三巻三冊の澄禪伝だったと思われるが、前後を欠いているのが惜しまれる。しかし澄禪上人の東北・関東地方における行実を記していて貴重である。本書を所持していた「井田又兵衛」は杉野町の井田治左衛門、屋輔の裏地を上人の庵室に提供した清水町の井田玄泉らと有縁の人であろうか。

※

澄禪（一六五五〜一七二二）は彈誓上人（一五五二〜一六一一）を慕ってその故地古知谷阿弥陀寺で晩年を過して没し、徳本（一七五六〜一八一八）は澄禪上人を慕って日野にしばしば入来し、留錫して衆庶を化益した。徳本上人の日野入来は④『澄善和尚御影傳』、⑤『澄禪上人繪傳記 段付 全』の成立に少なからぬ影響を与えたものと思われる。

徳本上人が日野を初めて訪れたのは享和三年（一八〇三）八月のこと、澄禪寺四代徳禪が誌した「過去帳」に、「茲に当庵は往時元禄の頃に澄禪上人開創の勝跡なるに、柴の戸さしの跡さへたへて無ししを、いぬる享和三年のとし吾徳本行者遠く白雲をたつね自から中興の主として不断念仏の道場となしたまひ」とあって、徳本上人が平子山の澄禪上人の旧地を参詣し、衆庶を化益して衰退した澄禪庵を不断念仏の道場として中興したことが知られる。

次いで文化二年（一八〇五）十月、徳本上人は再び日野を訪れている。信楽院蔵『徳本行者入来日記』²によると、上人は同月十五日に平子に到着し、同二十九日より信楽院に五日間留錫して結縁したのち甲賀郡内を巡化

し、十一月十五日と十二月十五日に瑞華庵で別時念仏を修し、翌三年正月六日に結縁十念を修し、八日夜越前に向かって旅立ったという。とすれば輔長画『徳本上人四十九歳壽像』は、「文化三年丙寅正月七日上人奉尊意於座前圖之」と記しているから、輔長は上人が日野を発つ前日に平子の瑞華庵でこれを描き上げたのである。

文化七年三月、徳本上人は日野に入来した。同月十八日から二十日まで信楽院において法然上人六百年遠忌があり、『法然上人行状絵伝』四幅が開陳された。四幅はいずれも縦三六〇糎・横一八〇糎を超える巨幅で、その紙背には徳本上人真筆の大名号が大書されている。第四幅裏面には大名号に添えて信楽院十五世本阿が「文化七年^{庚午}三月十八日／宗祖大師第六百回豫修供養之」と書き付けている。上人は絵伝開眼のために日野に来たのであろう。上人の行化は念仏会所に参詣者が群集し、教化に随順して日課を誓約し精進不退に念仏を修するのが常であって、日野も例外ではなかった。おそらく上人は先年日野を行化した折、法然上人六百年遠忌を期して『澄善和尚御影傳』と『法然上人行状絵伝』を制作すべきことを有力信者に慫慂していたものと推量される。なお、文化九年三月三日、平子の澄禅庵において澄禅上人百回忌法要が七日間にわたって執行された。その規模の大きさからも、近江日野の人たちの、澄禅上人に対する信仰の深さがいかに知られるのである。

注

1 牧達雄氏「近江平子澄禅山を中心とする徳本上人の化益」（『徳本行者全集⑥』昭和五五年二月、山喜房佛書林）所引。

2 「徳本行者全集⑤」（昭和五四年二月、山喜房佛書林）所収。

※ 信楽院御住職伊藤学史師に御親切を戴いた。感謝奉る。

澄善和尚御影傳・絵場面構成

38	37	36		
35	34	33	32	
31	30	29	28	27
26	25	24	23	22
21	20	19	18	
17	16	15	14	13
12	11	10	09	
08	07	06	05	
04	03	02	01	



信楽院蔵『法然上人行状絵伝』第4幅

(右上) 信楽院蔵 谷輔長筆『徳本上人四十九歳壽像』(部分)

(右下) 信楽院蔵『法然上人行状絵伝』第4幅紙背(部分)



澄善和尚御影傳

文化五年^{戊辰}春三月

高田法眼敬輔外孫

止齋谷輔長製画





02. 厭離崩于心

寺嶋氏は漆器業を営む。或夜寺嶋氏秘蔵の錦手の瓶器を鼠が損じたが、寺嶋氏は童子の上人を疑う。上人はこれを厭うて出離の念を発し、14歳で養家を出て行方知れずとなる。



01. 村人託兒于寺嶋氏

上人は明暦元年（1655）江州日野の産。父川尾氏は太閤秀吉の三韓征伐を逃れて肥前に漂着した一族の裔。母は川原村菅生氏。父母没し、村人は孤独無頼の小児の養育を清水町寺嶋氏に託す。



04. 眞入剃度名入言

眞入和尚は野淵の同宗の寺を借りて童子上人を剃髪、入言と名付く。住僧は古い墨染を恵む。入言が行脚の志を述べると、眞入和尚は平子村の自庵地蔵堂に来るべきを約束す。



03. 途謁眞入言志願

瀬田の野路で童子上人は眞入老和尚と出会う。和尚は信楽院身誉上人の弟子で隠遁僧だった。童子上人は和尚に発心の由を語る。なお、瀬田の川辺で自剃りしたとする別伝あり。



06. 詣遇聖院 再謁眞入

入言は日野に帰り、平子村眞入和尚の自庵地蔵堂に詣って再会し、以後和尚に隨身す。和尚は隠遁の道人なるゆえ地蔵堂に閑居あり。村民これを眞入庵と呼ぶ。



05. 異人授悉曇符咒

比叡山登山の折り日没して道に迷い、遙かな灯火をたどり小庵にたどり着く。庵主の異人から夜通し教えを受け、悉曇符呪の法を授かり、再び諸方へ行脚す。



08. 在心看主大聖寺請言誓学資于其檀越

在心上人は信楽院身譽上人の末弟で大聖寺主の時、中井市左衛門はじめ篤信の檀徒に言誓の学費調達を依頼する。中井家に言誓の書翰が残る。在心は元禄 10 年（1697）5 月 17 日信楽院で優化。



07. 在心教導真入名言誓

隠遁僧の弟子では出世が叶わぬので、信楽院法会の時、真入は入言の教導を在心和尚に依頼す。在心は入言と師弟の誓約をし、法名言誓を授く。以後言誓は在心に隨身す。3 年また 8 年という。



10. 従学廓瑩

廓瑩和尚に就いて教えを受く。他に優れ、三縁山の両脈を相承し精蓮社進誉と号す。ただ観念称名を事とし、林藪に遁れん志深く、寮を出て名山霊地を巡歴す。



09. 入願求門名澄禪自信楽院往東都

寛文 13 年（1673）言誓 18 歳、江戸三縁山増上寺学寮に入学す。在心上人の檀徒が費用を調達してくれ、信楽院然誉願求和尚の弟子として澄禪と号し、信楽院より旅立つ。



12. 従東都還郷

延宝 7 年（1679）上人 25 歳、帰郷したが真入老師は遷化し、在心和尚は他国に在り、信楽院また帰依人の宅に滞留あって、のちまた江戸へ下向し三縁山学寮で 5 年修行す。



11. 法施于金華山

澄禪上人奥州の金峯山に到り、山神に読経を授く。山神これを謝し、金塊を法施す。上人は帰郷の際、これを正明寺寂門和尚に与える。寂門はその金をもって観音像を莊嚴す。



14. 廬于清水街牢畔

知雲の勧めを否みがたく、町の傍清水浄き所に庵を建てて暫く止住す。上人が智雲老に与えた仮名書弥陀経・梵字名号・仮名法文等、今も同家に秘蔵せらる。



13. 中井知雲設斎招請視小鳥馴

天和4年(1684)上人30才、帰郷し知雲中井市左衛門に遊学援助を謝し、中井家に滞留す。上人斎の米を軒の雀に施すに、雀は上人の手の上に来て喰む。皆人、上人の道行を感嘆す。



16. 練修于塔峯

貞享2年(1685)8月15日、彈誓上人草創の靈地塔峯阿弥陀寺に着き、中興融弁上人に謁す。はじめは衆に仕え、後は巖窟に入り、墨染弊衣を着し穀を避け、石上座で称名勤行、仏身観を修す。



15. 辞郷抖擻送別請十念

住庵は人家近く、世塵を厭うて庵を辞す。上人もとより山林抖擻の志深く、故真入老師の平子村に隠遁を望むが叶わず、抖擻のため相州塔峯へ旅立つ。送別の信徒に請われて十念を授く。



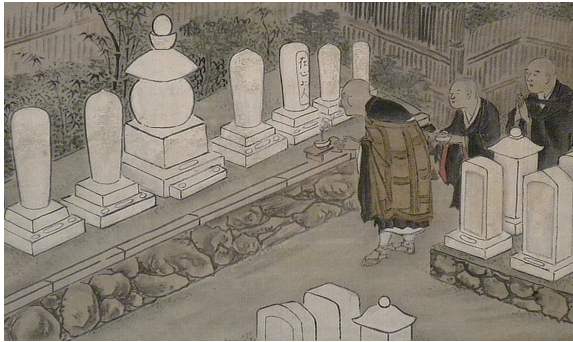
18. 富嶽見佛

ある年9月中旬、念仏三昧発得を期して富士に登山す。空中に大身の弥陀如来が現れ説法あり。拝聴歓喜すると覚えて塔峰の麓に墜落す。驚く農夫に問うに今日は2月15日という。



17. 苦行于鶴窟

相州曾我鶴窟に移り無言行を修す。塔峯修行の行法僧と四方に聞え参詣群集す。麓に垣を結び参詣を留めさせたが剃髪染衣の帰依人多し。化縁尽きたと観じ、移って塔峯、また辨才寺に庵を結ぶ。



20. 歸信樂院謁在心墓

信樂院の在心上人の墓所に詣で、平子村太田清左衛門に頼み中村孫右衛門の持地岩木山の田畑の傍に草庵を求め、暫く止住す。摺鉢で米を洗い、飯を炊いたこともありしという。



19. 訪至玄洛北僑居

縁山の学友至玄を洛北の僑居に尋ね、止宿して渋紙包の蚕豆を食し、畿内を巡歴す。また塔峯に戻り、信徒受傳宅に小庵を結び、元禄 12 年（1699）正月 2 日、江州へ帰郷す。



22. 覆坏山上草庵賜詣途天墮数珠下其主

覆坏山（丸茅野山）に尼 2 人参詣す。路中に数珠を落し、念珠なく十念を授らんことを願うと、上人は「落した念珠はこれであろう」と取出し与えられた。尼人の不思議がること頻りなり。



21. 結茅于平子民家側姑棲

平子の丸茅野山に庵を結びたき旨を信樂院から役所に願い出る。元禄 12 年秋、丸茅野山の民家近くに畳鋪の柴の庵を建て、泉水を八功独水に擬え、杜若・鬼灯・南天を植えて愉しむ。



24. 大石自然上自落合谷

丸茅野山の落合谷にあった大石がいつしか庵の辺に置かれていたので村人は驚き不思議がった。これを施餓鬼石と呼ぶのは、上人がこの石の上で施餓鬼を修したゆえである。



23. 難行于熊野瀑布

熊野村は信樂院の檀越で上人に帰依し、村民は 8 月の熊野権現の祭祀の日まで瀧に打れ病切の行を修した。この瀧は近江山伏の行場であり、澄禅上人もこの瀧で七昼夜の立行を修した。



26. 本間養軒誠上人懺悔

医師本間養軒は吹矢の名人で猫を好んだ。平子山に参り上人を拝した。養軒が吹矢筒を隠し来たことを上人が看破すると、養軒は驚き懺悔して吹矢筒を壊し、十念を授け、日課を請うた。



25. 法道仙贈末敷蓮華瑞華二字

仙人来臨石は丸茅野山に法道仙人が来てこの石に座し、上人の行法勇猛を讃嘆し末敷蓮華2茎を授与した処。上人は瑞華の2字を自刻して庵の扁額とした。



28. 派遣弟子 還勢州神戸避疫

伊勢神戸出身の弟子に、或日上人は「近く生国に厄病が起こる。これを除くために早く帰国すべし」と告げた。果してその年厄病流行し多数の死者が出た。上人は未然を知る人であった。



27. 識有菓鮮贈將賜留人

上人は信不信を神遊自在の心眼で見分け、信あって参詣する者には十念を授けた。「快晴の日は平子参りの日」の諺もあるほど参詣者が増えた。供養物の施しは、これを参詣人に分け与えた。



30. 中川常有請于洛北古知谷

正徳4年の招請に続き享保元年(1716)10月5日、中川常宇が阿弥陀寺僧とともに丸茅野山に参り、彈誓上人の霊地古知谷阿弥陀寺へ招請す。澄禅上人これを受諾す。



29. 在心祥忌捻香

正徳3年(1713)5月17日、信楽院在心上人17回忌法会に上人出仕す。丸茅野山に在庵16年、平子村への下山も信楽院へ参じたのもこの一度だけという。帰途蔵王村人に十念を授く。



32. 厭途頭送別衆自小道

上人を見送る人々が日野町通に群集し、信楽院には帰依者が集まるが、上人はこれを避けて裏町通りを抜けて堅田に至る。古知谷からの迎えがあり、平子の送り人を帰す。



31. 下覆坏留平子熊野授十念

享保元年 10 月 22 日、上人は庵の持物を焼き払い覆坏山を下山す。孫右衛門方へ立寄り平子・熊野の村人に暇乞の十念を授く。村人 3 人、上人を古知谷まで送る。



34. 太田生拜謁語終寂然而遷化

享保 6 年 (1721) 2 月 4 日、澄禅上人遷化。67 歳。その前日阿弥陀寺住職と浄土の花々を語る。臨終には奇しくも参詣していた平子村太田清右衛門が立会い遺言を聞く。



33. 棲于古知谷辞木繒紳来訪

上人は古知谷阿弥陀寺裏の山上に炉一つの小庵を結び過す。法縁を結ばんとする庶人が群参し、やんごとなき貴顕も来詣す。上人「我は無徳、法器にあらず」とこれを厭う。



36. 陀毘

常宇『行状記』は命終翌 5 日に茶毘作法ありというが、村民到着まで遺骸は遷化の御姿そのままにあり、村民はこれを拝した。葬式は分骨等々、村民・常宇相議して執行された。



35. 計聞平子熊野日野檀越十八人西上

清右衛門直ちに信楽院に計報を伝う。院主霊岳和尚平子・熊野の檀中へ知らせ、平子・熊野・日野の帰依者 18 人、信楽院弟子 2 人、急ぎ堅田より叡山麓を越え、その日のうちに古知谷に至る。



37. 埋遺骨于覆坏山上

遺言に従って遺骨は平子村覆坏山上に埋納す。上人は常宇に「骨を浄き流れに流せ」と遺言されたというが、清右衛門には懐かしい真入和尚の住庵址に埋骨すべき旨遺言された。



38. 置像且立碑立

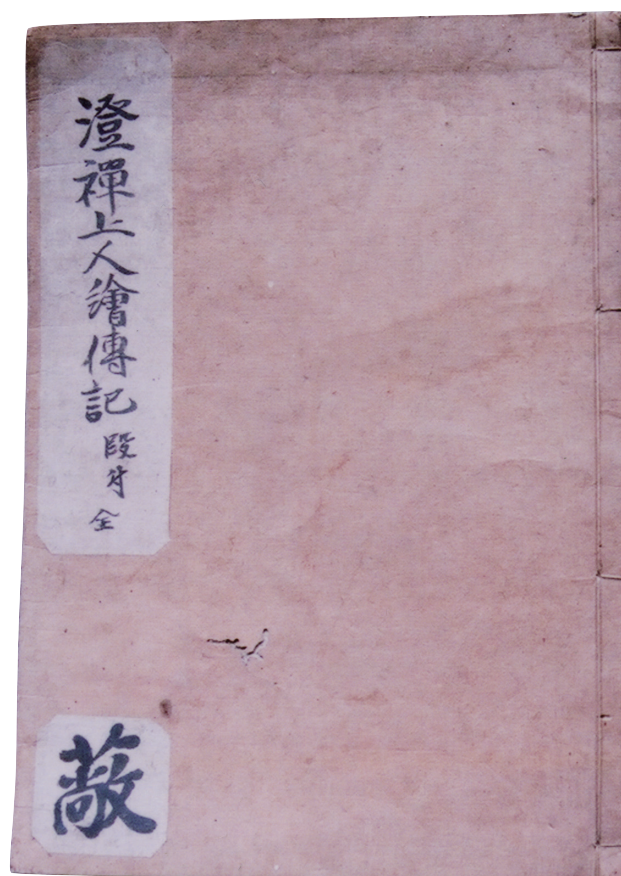
阿弥陀寺の庵近くに巖窟を穿って上人の石像を安置し傍に常宇撰文の石碑を建つ。丸茅野山には明和6年（1769）9月上人石像を石室に安置し、毎歳2月4日に法会を執行す。



（宮島コレクション蔵）

左の御影ふだは、大正9年（1920）2月、澄禅寺で興行された澄禅上人200回忌に印施されたものと思われる。木食修行僧の姿ではなく、浄土宗僧として正式の服装をした上人が描かれている。日常の上人を中川常宇は『澄禅和尚行状記』に「巖居弊服ノミナランヤ、爪髪ヲ祝サス、蚤虱ヲ除カス」と伝え、『澄禅上人繪傳記 全』も木食行中の上人を「鬚髪長ク僧ナラス俗ナラス」と記しているが、谷田輔長が『澄善和尚御影傳』に描いた上人は、そのほとんどが僧としての平服姿で、木食僧を想わせるものはない。

古知谷阿弥陀寺に上人の廿五条衣・略廿五条衣・安陀衣・直綴が伝わる。薄茶色の略廿五条衣は祐天大僧正が上人に寄附したもので、上人は晩年これを中川常宇に授与し、常宇は三井一成坊に、一成坊は心澄恵厚に、恵厚は阿弥陀寺信阿に授与したものである。また鼠色の安陀衣には裏書があって、柴田六五郎氏『復刻澄禅和尚行状記上中下並續』に紹介がある。それによると、この安陀衣は上人が弟子膽阿に与えたもので、その折り、「抑此袈裟ハ八歳ノ童女麻ヲウミ、八旬ノ老婆織女トシテウヤウヤシク衣躰ヲナシ、斯ノコトク略法服ニ仕立テルマテ兩女數千萬彌陀本願ノ名號ヲトナヘトナヘ成セシ所ノ無上功德衣ナリ。余年來コレヲ掛テ稱佛ノ功ヲツミ徳ヲカサネヌ。死期ヤウヤク近キニアラン。仍テ今コレヲ附與セント思フ。宜ク愛用スヘシ」と訓戒したという。以って上人の日常が知られる。



澄禪上人繪傳記 段付

俗姓寺嶋氏養育之段

上人者江州日野産人也俗姓川尾氏其祖父太閤豊臣秀吉公三韓征伐ノ時乱ヲ避テ肥前國名古屋ニ漂着シ相滞コト三年後京師ニ僑居シ故有テ江州日野ニ移リ松尾町裏家ニ住ス后同志ノ韓人追来テ井ヲ同クシテ共ニ住リ^{後是ヲ朝鮮屋鋪ト称ス}皇甫休ノ後胤ニ川尾氏ト称シ宇文官ノ流ヲ^{ウツミ}生海氏ト称シ川尾何某ニ一男子有且其妻ニ

澄禪上人繪傳記 段付

俗姓寺嶋氏養育之段

上人者江州日野産人也俗姓川尾氏其祖父太閤豊臣秀吉公三韓征伐ノ時乱ヲ避テ肥前國名古屋ニ漂着シ相滞コト三年後京師ニ僑居シ故有テ江州日野ニ移リ松尾町裏家ニ住ス后同志ノ韓人追来テ井ヲ同クシテ共ニ住リ^{後是ヲ朝鮮屋鋪ト称ス}皇甫休ノ後胤ニ川尾氏ト称シ宇文官ノ流ヲ^{ウツミ}生海氏ト称シ川尾何某ニ一男子有且其妻ニ

(白丁)

「表表紙見返

川原村菅生氏ヲ娶テ一子ヲ産ス是則澄禪上人
也無程其父没ス其妻上人ノ児ヲ懷テ川原村父ノ家
ニ歸リ其母モ世ヲ去リ孤獨無頼ノ小兒ナリシヲ憐ミ清
水町ノ人寺嶋氏ノ家ニ養育シ其家ノ業漆器ヲ造
リ習ハシム上人生涯素生ヲ述給ス其比禁制ノ宗門
異國ノ流尚包ム事有シ故也トリ後上人ノ德行世ニ傳
レサセ給ヒ信仰ノ徒窮民ノ古ヲ隱スト云ヘ共原ト只ナラヌ
後胤ナレハ係ル權者出生有シ也

初發心之段

養育ノ主人ノ家ニ有テ或夜主人秘藏ノ錦手ノ瓶罎
鼠ノタメ損スト云ヘトモ主人上人ノ童子ヲ疑ノ色有ヲ
深ク是ヲ厭テ是ヨリ出離ノ念ヲ發シ十四歳ノ年家ヲ
出テ暫ク行衛ヲシラス

眞入老和尚ニ逢テ刺髮之段

瀬田ノ野路ニテ眞入老和尚ニ逢玉フ眞入和尚ハ信樂院
身譽上人ノ弟子ニテ隱遁ノ僧也童子其發心ノ故ヲ

川原村菅生氏ヲ娶テ一子ヲ産ス是則澄禪上人

也無程其父没ス其妻上人ノ児ヲ懷テ川原村父ノ家

ニ歸リ其母モ世ヲ去リ孤獨無頼ノ小兒ナリシヲ憐ミ清

水町ノ人寺嶋氏ノ家ニ養育シ其家ノ業漆器ヲ造

リ習ハシム上人生涯素生ヲ述給ス其比禁制ノ宗門

異國ノ流尚包ム事有シ故也トソ後上人ノ德行世ニ勝

レサセ給ヒ信仰ノ徒窮民ノ古ヲ隱スト云ヘ共原ト只ナラヌ

後胤ナレハ係ル權者出生有シ也

初發心之段

養育ノ主人ノ家ニ有テ或夜主人秘藏ノ錦手ノ瓶罎
鼠ノタメ損スト云ヘトモ主人上人ノ童子ヲ疑ノ色有ヲ
深ク是ヲ厭テ是ヨリ出離ノ念ヲ發シ十四歳ノ年家ヲ
出テ暫ク行衛ヲシラス

眞入老和尚ニ逢テ刺髮之段

瀬田ノ野路ニテ眞入老和尚ニ逢玉フ眞入和尚ハ信樂院
身譽上人ノ弟子ニテ隱遁ノ僧也童子其發心ノ故ヲ

語り和尚是ヲ感シ速ニ野洲ノ辺同宗ノ寺ヲ借りテ剃
髮法名入言ト名附給ヒ住僧古キ墨染ヲ惠ミ玉ヒ入言
子暫ク行脚ノ志ヲ述玉ヘハ老和尚我棲乎子村ノ庵ニ來
ルヘキヲ約シ別レ給ウ

叡山登リ異人ニ逢玉ウ段

登山時道ニマヨヒ日没シ行衛ヲシラス時ニ燈火ノ光リ有
遙ニ随ヒ行一ノ小庵有尋ヨリ玉ヒ異人ニ通夜教ヲ受悉
曇符咒ノ法ヲ授リ諸方行脚シ日野ニ歸リ平子村

眞入師ノ庵ニ來リ隨身アリ

在心和尚ノ弟子ト成玉ウ段

在心和尚ハ信楽院身譽上人ノ末弟ニテ撰州多田木津村
ニ住職シ玉ヒテ當院ニ法會有テ來リ給ウ眞入和尚隱
遯ノ道人ナリシ故平子村地藏堂ニ閑居シ人ヨリ眞入庵ト呼
フ入言子老和尚ニ隨身有テ信楽院ヘ連レ來リ老和尚ノ曰
隱遯ノ僧弟子ヲ持出世可為致無甲斐迎入言子ヲ在
心和尚ニ頼ミ給ウテ師弟誓約有リ誓ノ一字ヲ授ケテ

語り和尚是ヲ感シ速ニ野洲ノ辺同宗ノ寺ヲ借りテ剃

髮法名入言ト名附給ヒ住僧古キ墨染ヲ惠ミ玉ヒ入言

子暫ク行脚ノ志ヲ述玉ヘハ老和尚我棲乎子村ノ庵ニ來

ルヘキヲ約シ別レ給ウ

叡山登リ異人ニ逢玉ウ段

登山時道ニマヨヒ日没シ行衛ヲシラス時ニ燈火ノ光リ有
遙ニ随ヒ行一ノ小庵有尋ヨリ玉ヒ異人ニ通夜教ヲ受悉
曇符咒ノ法ヲ授リ諸方行脚シ日野ニ歸リ平子村

眞入師ノ庵ニ來リ隨身アリ

在心和尚ノ弟子ト成玉ウ段

在心和尚ハ信楽院身譽上人ノ末弟ニテ撰州多田木津村
ニ住職シ玉ヒテ當院ニ法會有テ來リ給ウ眞入和尚隱
遯ノ道人ナリシ故平子村地藏堂ニ閑居シ人ヨリ眞入庵ト呼
フ入言子老和尚ニ隨身有テ信楽院ヘ連レ來リ老和尚ノ曰
隱遯ノ僧弟子ヲ持出世可為致無甲斐迎入言子ヲ在
心和尚ニ頼ミ給ウテ師弟誓約有リ誓ノ一字ヲ授ケテ

言誓ト法名ヲ改メ玉ウ在心和尚ハ博學說法能辨ノ
僧也後多田ノ住庵ヲ辞シ諸方遊歴シ信樂院ニ來リ
暫大聖寺ニ間主有則大聖寺モ原ト信樂院世代圓譽
安翁和尚大窪六角ノ藥師堂ニ隱居有テ後岡本圓通
寺ニ住シ又藥師堂ニ歸庵セラル、ノ時慶長七年江戸ヨリ
檢地御改御奉行彦坂九兵衛殿安翁和尚故有テ願ヨリ
除地ト成安翁和尚ハ彦坂城産也是ニヨリ一寺草創也藥師寺ト稱シ后
信樂院ノ寺号大松寺ト号セラル其後故有テ大聖ニ文字

大改ム安翁和尚皈依ノ徒信樂院ヨリ分レテ事ノ相和セサル
ヲ在心和尚閑主ノ比能ク和合ス皈依徒是多ク此時言
誓子在心和尚ニ隨身有在心和尚閑主三年ト云不詳后
又諸方遊歴有テ澄禪上人四十六歳ノ時相別修
行ノ比元録十年丁丑五月十七日信樂院ニテ僊化アリ
寂蓮社靜譽上人義準和尚ト号シ信樂院ニテ葬リ當
寺世代塔ノ傍ニ墓ヲ築ク

言誓子東都入學ノ段

寛文十二年壬子年言誓子十八才ノ時江戸入學師跡ノ
頼ナキヲ以在心上人皈依ノ徒ニ相議シ給ヒ其用費調東
都入學無住隱者ノ弟子ニテ入學難成ニ付當院然
譽願求和尚ノ弟子トシテ澄禪ト号シ當院ヨリ發
足有テ三緣山増上教寺學寮ニ入寺ヲ引廓螢和尚
ニ從ヒ教ヲ受ケ給ウ在心上人皈依ノ中ニモ中井市左エ門方ヨ
リ厚キ惠ミ有ヲ以テ折々學寮ヨリ音信ノ書韓今此家

ニ秘藏有三緣山両脉相承シテ精蓮社進譽ト号ス世常
ノ學寮僧侶ニスクリサセ給ヒ法問ノ勞心ナリ只觀念稱
名ヲ事トシ跡ヲ林藪ニ遯レン御志深ク遂ニ寮ヲ出テ
名ニヲ、名山靈地ヲ順歷シ給ウ

奥州金峯山ニ到リ給ウ段

遙々金峯山ニ到リ山神ニ讀經ヲ授ケ給ウ山神祝テ
是ヲ謝シ金塊ヲ法施シ是ヲ受テ后郷ニ歸リ玉ヒシ時
正明寺寂門和尚ニ与ヘ玉ウ寂門師其金ヲ以テ觀音

言誓子東都入學ノ段

寛文十二年壬子年言誓子十八才ノ時江戸入學師跡ノ
頼ナキヲ以在心上人皈依ノ徒ニ相議シ給ヒ其用費調東
都入學無住隱者ノ弟子ニテ入學難成ニ付當院然
譽願求和尚ノ弟子トシテ澄禪ト号シ當院ヨリ發
足有テ三緣山増上教寺學寮ニ入寺ヲ引廓螢和尚
ニ從ヒ教ヲ受ケ給ウ在心上人皈依ノ中ニモ中井市左エ門方ヨ
リ厚キ惠ミ有ヲ以テ折々學寮ヨリ音信ノ書韓今此家

ニ秘藏有三緣山両脉相承シテ精蓮社進譽ト号ス世ノ常
ノ學寮僧侶ニスクレサセ給ヒ法問ノ勞心ナリ只觀念稱
名ヲ事トシ跡ヲ林藪ニ遯レン御志深ク遂ニ寮ヲ出テ
名ニヲ、名山靈地ヲ順歷シ給ウ

奥州金峯山ニ到リ給ウ段

遙々金峯山ニ到リ山神ニ讀經ヲ授ケ給ウ山神祝テ
是ヲ謝シ金塊ヲ法施シ是ヲ受テ后郷ニ歸リ玉ヒシ時
正明寺寂門和尚ニ与ヘ玉ウ寂門師其金ヲ以テ觀音

大士ノ莊嚴ニ成シ玉ウ

江戸ヨリ郷ニ歸リ給ウ段

延寶七年己未 天保卯マテ貞六十三年澄禪上人凡五歲ニ而一度國ニ歸リ

眞入老師ハ僊化ノ後在心和尚ハ他國ニ在尋逢玉ヒ

テ信楽院ニ歸リ又ハ皈依人ノ宅ニ滯留有テ后又東武ヘ

下向有又五ケ年學寮ニ修行有天和四年甲子年上

人三十才ニ而國ニ歸リ山林ニ引籠隱遯ノ御志深ク眞入

老師ノ踪蹤平子村ヲシタハシク思召処ニ皈依ノ衆ヲ尋

智雲子ヲ訪ヒ遊學惠恩ヲ謝シ玉ヘハ又深ク留メ有テ

此家ニ滯留アリ智雲子又此地ノ住達テス、メアレハ

イナミカタク町ノ傍清水淨キ処ニ智雲庵ヲ立玉

ヘハ暫ク住有テ智雲老ヘ書シ与ヘ玉ウ假名手ノ

弥陀經梵字ノ名号假名文ノ法文ノ写シ等今此家

ニ秘藏シ寶トセラル或曰此家ニ法會有テ齊終リ

上人米ヲ一掌乞ヒ玉ヒ軒ニ有雀ヲ呼テ米ノマキテ施

シ玉ウ後ハ鳥上人ノ手ノ上ニ米ヲ喰ム皆人上人道行

大士ノ莊嚴ニ成シ玉ウ

江戸ヨリ郷ニ歸リ給ウ段

延寶七年己未 天保卯マテ貞六十三年澄禪上人廿五歲ニ而一度國ニ歸リ

眞入老師ハ僊化ノ後在心和尚ハ他國ニ在尋逢玉ヒ

テ信楽院ニ歸リ又ハ皈依人ノ宅ニ滯留有テ后又東武ヘ

下向有又五ケ年學寮ニ修行有天和四年甲子年上

人三十才ニ而國ニ歸リ山林ニ引籠隱遯ノ御志深ク眞入

老師ノ踪蹤平子村ヲシタハシク思召処ニ皈依ノ衆ヲ尋

智雲子ヲ訪ヒ遊學惠恩ヲ謝シ玉ヘハ又深ク留メ有テ

此家ニ滯留アリ智雲子又此地ノ住達テス、メアレハ

イナミカタク町ノ傍清水淨キ処ニ智雲庵ヲ立玉

ヘハ暫ク住有テ智雲老ヘ書シ与ヘ玉ウ假名手ノ

弥陀經梵字ノ名号假名文ノ法文ノ写シ等今此家

ニ秘藏シ寶トセラル或曰此家ニ法會有テ齊終リ

上人米ヲ一掌乞ヒ玉ヒ軒ニ有雀ヲ呼テ米ノマキテ施

シ玉ウ後ハ鳥上人ノ手ノ上ニ米ヲ喰ム皆人上人道行

ヲ感シケリ其住庵人家近ク世塵ヲ厭ヒ玉ヒテ庵
ヲ辞シ信樂院ヨリ又相列ノ御下向有

相列塔峯苦修之段

貞享二年乙丑八月十五日塔峯阿弥陀寺ニ着玉ウ
當山ハ彈誓上人草創ノ靈地也中興ニ融辨上人ト云ル大德
有リ其德行四方ニ聞ヘ道心深キ邈世念佛門ノ衆來會
有シ由澄禪上人傳ヘ聞玉ヒ始メハ衆ニ仕ヘ後ハ巖窟ニ入
修行有岩間ノ苔清水シタ、リケレハ笠ニテ覆ヒ俗盤

ニ座シ玄冬ノ比單ノ衣墨染弊衣ヲ着シ觀念ニ座シ又
稱名勤行穀ヲ避安然トシテ自得ノ色有又佛身觀
ヲ修シ石上ニ座シ終ニ其道行修シ給ウ

同列曾我鶴窟苦修之段

巖窟幽景薜蘿生茂リ世塵ノ外ノ仙境也窟高サ
六尺余深キハ三十尺ニ過タリ草ヲ敷テ座シ數日無言
ノ行ヲ修シ無念無色相鳥類來テ頂ニ宿ス后村人
見出シ窟中ニアヤシキ非人棲ケルト云后塔峯ニ修行有シ

ヲ感シケリ其住庵人家近ク世塵ヲ厭ヒ玉ヒテ庵
ヲ辞シ信樂院ヨリ又相州ヘ御下向有

相州塔峯苦修之段

貞享二年乙丑八月十五日塔峯阿弥陀寺ニ着玉ウ
當山ハ彈誓上人草創ノ靈地也中興ニ融辨上人ト云ル大德
有リ其德行四方ニ聞ヘ道心深キ邈世念佛門ノ衆來會
有シ由澄禪上人傳ヘ聞玉ヒ始メハ衆ニ仕ヘ後ハ巖窟ニ入
修行有岩間ノ苔清水シタ、リケレハ笠ニテ覆ヒ俗盤

ニ座シ玄冬ノ比單ノ衣墨染弊衣ヲ着シ觀念ニ座シ又
稱名勤行穀ヲ避安然トシテ自得ノ色有又佛身觀
ヲ修シ石上ニ座シ終ニ其道行修シ給ウ

同州曾我鶴窟苦修之段

巖窟幽景薜蘿生茂リ世塵ノ外ノ仙境也窟高サ
六尺余深キハ三十尺ニ過タリ草ヲ敷テ座シ數日無言
ノ行ヲ修シ無念無色相鳥類來テ頂ニ宿ス后村人
見出シ窟中ニアヤシキ非人棲ケルト云后塔峯ニ修行有シ

行法ノ僧也ト四方ニ聞ヘ参詣群集ス是ヲ厭ヒテ後
人ニ頼ミ玉ヒ麓ニ垣ヲ結ヒ参詣ヲ留メサセ玉ヘ共刺髪
染衣ノ皈依人タカリケル其後此地ノ化縁尽サセ玉ヒ
シ迎塔峯本堂ノ西南ニ幽成庵室ヲ結ヒ暫在住有
又同國辨才寺ハ彈誓上人ノ開基塔峯ノ末寺此処ニ
庵ヲ結ヒ暫ク棲給ウ

富士山見佛之段

比ハ九月中旬富士山念佛三昧施□發得センコトヲ心ニ

凝テ一合ニカ、リ玉ヘハ雪吹上ケテ登ル事得カタシ石室
ニ入テ觀念ニ座シ日有テ登山有寒氣随ニ通り惣身堅
凍ノ如ク命モ絶ナント若死セハ攝取ノ本願有安ク西
方寶國ニ生セント口稱シ聲モコ、ヘテ心ハカリニ助給
ヘノ念力不_レ只儀成哉虛空ヨリ一滴口ニ漱キ其味甘
露ノ如シ忽声潤ヒ稱名ノ声心眼開ケント不圖光明ノ
方ヲ仰キ見給ヘハ遙成空中ニ莊嚴微妙ノ寶橋
白雲ノ上ニ顯レ容顏美相ノ童子上人ヲ招キ給ウ

行法ノ僧也ト四方ニ聞ヘ参詣群集ス是ヲ厭ヒテ後

人ニ頼ミ玉ヒ麓ニ垣ヲ結ヒ参詣ヲ留メサセ玉ヘ共刺髪
染衣ノ皈依人多カリケル其後此地ノ化縁尽サセ玉ヒ

シ迎塔峯本堂ノ西南ニ幽成庵室ヲ結ヒ暫在住有

又同國辨才寺ハ彈誓上人ノ開基塔峯ノ末寺此処ニ

庵ヲ結ヒ暫ク棲給ウ

富士山見佛之段

比ハ九月中旬富士山念佛三昧施□發得センコトヲ心ニ

凝テ一合ニカ、リ玉ヘハ雪吹上ケテ登ル事得カタシ石室
ニ入テ觀念ニ座シ日有テ登山有寒氣随ニ通り惣身堅
凍ノ如ク命モ絶ナント若死セハ攝取ノ本願有安ク西
方寶國ニ生セント口稱シ聲モコ、ヘテ心ハカリニ助給
ヘノ念力不_レ只儀成哉虛空ヨリ一滴口ニ漱キ其味甘
露ノ如シ忽声潤ヒ稱名ノ声心眼開ケント不圖光明ノ
方ヲ仰キ見給ヘハ遙成空中ニ莊嚴微妙ノ寶橋
白雲ノ上ニ顯レ容顏美相ノ童子上人ヲ招キ給ウ

随ヒテ登リ覺ヘス進ミ宝橋ノ半ニ到リ玉ヘハ宝橋又
空中ニ飛去ト覺ヘ仰キ觀玉ウハ富士山倍セル大身ノ
弥陀如来寶蓮ニ座シ光明赫奕トシテ上人ノ頂ヲ照
シ玉ウ上人心驚キ奇異ノ思歡喜涙ト共ニ伏テ敬
礼三拜合掌シ稱名咽ニムセヒ如来御首頭ヲ動シ莞
尔ト微笑有テ御声世ニタトウヘキ物ナシ上人ノ為ニ説法
アリ拜聽歡喜ノ淚留メカタク忽然トシテ上人不覺
地ニ墜テタ□□玉ウ所ハ塔峯ノ麓也折シモ

農父有リ數年上人ヲ見ルニ鬚髮長ク僧ナラス俗ナ
ラス顏貌喜異ノ色有不審ク農父ノ云何レヨリ爰
ニ飛来リ給ウトヤアヤシミ聞上人答ル言ナリ今日ハ
幾日成ト問給ヘハ二月十五日也ト云上人筭ヘテ六ヶ月
ニ及ヒ不思議ト云モ更也上人又塔峯ノ艸庵ニ暫
ク住玉ヒ諸行道心熟シ練行ノ功積リ諸修觀相
ノ具證ヲ得結ヒ多年觀念兩三昧ヲ修シ玉ヘ共
偏ニ稱名ノ本願ヲ仰キ永ク觀佛ヲ捨テ專修一行

随ヒテ登リ覺ヘス進ミ宝橋ノ半ニ到リ玉ヘハ宝橋又

空中ニ飛去ト覺ヘ仰キ觀玉ウハ富士山倍セル大身ノ

弥陀如来寶蓮ニ座シ光明赫奕トシテ上人ノ頂ヲ照

シ玉ウ上人心驚キ奇異ノ思歡喜涙ト共ニ伏テ敬

礼三拜合掌シ稱名咽ニムセヒ如来御首頭ヲ動シ莞

尔ト微笑有テ御声世ニタトウヘキ物ナシ上人ノ為ニ説法

アリ拜聽歡喜ノ淚留メカタク忽然トシテ上人不覺

地ニ墜テタ□□玉ウ所ハ塔峯ノ麓也折シモ

農父有リ驚キ上人ヲ見ルニ鬚髮長ク僧ナラス俗ナ

ラス顏貌喜異ノ色有不審ク農父ノ云何レヨリ爰

ニ飛来リ給ウトヤアヤシミ聞上人答ル言ナリ今日ハ

幾日成ト問給ヘハ二月十五日也ト云上人筭ヘテ六ヶ月

ニ及ヒ不思議ト云モ更也上人又塔峯ノ艸庵ニ暫

ク住玉ヒ諸行道心熟シ練行ノ功積リ諸修觀相

ノ具證ヲ得結ヒ多年觀念兩三昧ヲ修シ玉ヘ共

偏ニ稱名ノ本願ヲ仰キ永ク觀佛ヲ捨テ專修一行

帰教ニ給ウ

洛北至玄和尚ヲ訪ヒ給ウ段

澄禪上人東都學寮ニ有シ時廓瑩和尚ノ教ヲ受
給ウ時其門ニ至玄ト云學友有師廓瑩和尚往生
要集ノ指麾鈔ヲ述作有テ弟子至玄洛北ノ僑居ニ
是ヲ校合有テ澄上人是ヲ傳ヘ聞訪ヒ玉ウ洪紙包
ヲ負テ弊衣旅行ノ姿ニテ至玄ノ僑居ノ边家ノ前ニ
立尋給ウ其□ノ婦乞人ト見テ今日ハ施シナシ早

ク去レト云上人ノ曰憐ミヲ傍舍ニ乞者ニアラス此辺ニ至玄
ト云沙門ノ居ヲ問ウト有之婦其名ヲ聞テ速ニ是ヲ
至玄子ニ告ル至玄子其名ヲ聞テ大ニ喜ヒ我高實
東武同寮ノ學友也ト出迎ヘ手ヲ執テ房ニ入レ敬
ヲ成故舊ヲ説テ悠然タリ上人則負給ウ洪紙包
包ヲ座右ニ置キ玉ウ至玄子澄上人ノ齊時ヲ問テ是
ヲ設ケントス上人是ヲ止メ飲食ヲ勞スルコト勿レト言
竟テ洪紙包ヲ開キ蚕豆ノ袋ヲ出シコレヲ食シ暫ク

帰敬シ給ウ

洛北至玄和尚ヲ訪ヒ給ウ段

澄禪上人東都學寮ニ有シ時廓瑩和尚ノ教ヲ受
給ウ時其門ニ至玄ト云學友有師廓瑩和尚往生
要集ノ指麾鈔ヲ述作有テ弟子至玄洛北ノ僑居ニ
是ヲ校合有テ澄上人是ヲ傳ヘ聞訪ヒ玉ウ洪紙包
ヲ負テ弊衣旅行ノ姿ニテ至玄ノ僑居ノ边家ノ前ニ
立尋給ウ其□ノ婦乞人ト見テ今日ハ施シナシ早

ク去レト云上人ノ曰憐ミヲ傍舍ニ乞者ニアラス此辺ニ至玄
ト云沙門ノ居ヲ問ウト有之婦其名ヲ聞テ速ニ是ヲ
至玄子ニ告ル至玄子其名ヲ聞テ大ニ喜ヒ我高實
東武同寮ノ學友也ト出迎ヘ手ヲ執テ房ニ入レ敬
ヲ成故舊ヲ説テ悠然タリ上人則負給ウ洪紙
包ヲ座右ニ置キ玉ウ至玄子澄上人ノ齊時ヲ問テ是
ヲ設ケントス上人是ヲ止メ飲食ヲ勞スルコト勿レト言
竟テ洪紙包ヲ開キ蚕豆ノ袋ヲ出シコレヲ食シ暫ク

房中ノ物乏ク山居ノ姿有テ好テ暫留ル事ヲ需メ
玉ウテ晝ハ則遊行シ昏及テ房ニ歸リ通夜不寝
座シテ夜明ケニ至ル其勞疲ナク止宿ニ旬ノ内幾内凡
順歷有シト云此後又相州ニ歸リ塔峯ノ邊受傳ト云
ル上人信仰ノ人ノ構ノ門ニ小庵ヲ結ヒ受傳カ願ヒ任セテ
暫棲給ウ元錄十二年^巳卯正月朔日ニ此地ノ化緣尽
ヌルト受傳ニ告ニ日発足有テ江州ヘ歸リ玉ウ

歸國ノ段

元錄十二年正月此里ニ着玉ヒ皈依ノ徒ヲ訪ヒ信樂院
ノ和尚ニ逢給ヒ去ク年在心上人僊化ノ由ヲ一礼申述給ヒ
直ニ在心上人ノ墓所ニ詣テ焼香讀經終リ玉ヒ寺
主和尚達テ在寺ヲ留メ玉ヘ共旅ノ草鞋ノ儘直ニ平
子村眞入和尚ノ隱棲地ニ可居事ヲ申述テ急キ平
子村ニ着太田清左衛門カ宅ニ草鞋ヲヌキ留テ急ニ
艸庵ヲ乞求メ玉ヒ中村孫右エ門ノ持地岩來山ノ辺田ノ
傍ニ竹ヲ曲テ茅ヲ覆ヒ雨露ヲ凌ク斗ノ艸庵ヲ求メ

房中ノ物乏ク山居ノ姿有テ好テ暫留ル事ヲ需メ

玉ウテ晝ハ則遊行シ昏及テ房ニ歸リ通夜不寝

座シテ夜明ケニ至ル其勞疲ナク止宿ニ旬ノ内幾内凡

順歷有シト云此後又相州ニ歸リ塔峯ノ邊受傳ト云

ル上人信仰ノ人ノ構ノ門ニ小庵ヲ結ヒ受傳カ願ヒ任セテ

暫棲給ウ元錄十二年^巳卯正月朔日ニ此地ノ化緣尽

ヌルト受傳ニ告ニ日発足有テ江州ヘ歸リ玉ウ

歸國ノ段

元錄十二年正月此里ニ着玉ヒ皈依ノ徒ヲ訪ヒ信樂院

ノ和尚ニ逢給ヒ去ク年在心上人僊化ノ由ヲ一礼申述給ヒ

直ニ在心上人ノ墓所ニ詣テ焼香讀經終リ玉ヒ寺

主和尚達テ在寺ヲ留メ玉ヘ共旅ノ草鞋ノ儘直ニ平

子村眞入和尚ノ隱棲地ニ可居事ヲ申述テ急キ平

子村ニ着太田清左衛門カ宅ニ草鞋ヲヌキ留テ急ニ

艸庵ヲ乞求メ玉ヒ中村孫右エ門ノ持地岩來山ノ辺田ノ

傍ニ竹ヲ曲テ茅ヲ覆ヒ雨露ヲ凌ク斗ノ艸庵ヲ求メ

暫住玉ウ 此時摺録ニテ米ヲ洗ヒ其鉢ニ而
飯ヲタキ玉ヒシコトモ有シト云

平子村ノ南丸茅野山庵ノ段

丸茅野山ニ庵ヲ結ヒ棲セラレ度由ヲ村人ニ乞玉ヒ
此所ニ庵ヲ造ルヘキ事ハ信楽院ヘ窺ヒ可然ト相
議シ信楽院ヘ申ケレハ信楽院ヨリ役人ニ窺ヒ玉ヒ御
領御代官義村奎左エ門殿ヘ祈ヘ許シ有テ元禄十二
年ノ秋両村人寄合丸茅野山上ニ二畳鋪ノ柴ノ
庵一日ニ成就ス西ニ向テ一窓ヲ開キ入口南向常竹

ト木ニテ角違ヒ下文字ニ結テ戸ニ片トリ庵ノ東南
ニ丁斗隔テ水ヲ求メ庵ノ前ニ引半月形リノ泉水
ハ功獨水ニナソラヘ是ヲ樂ミ杜若ホウツキヲ植南天
ヲ好ミ玉ヒ川原村菅生氏ノ通家櫻井氏ヨリ乞需メ
是ヲ植玉ヒシ也

或日尼人一兩人伴ヒ上人ニ參詣シ路ニテ数珠ヲ落シ
念珠ナク十念ヲ授ラン事ヲ申ケレハ上人其道ニテ
落サレタル念珠ハ是ナルヘシト与ヘ玉ウ尼人大ニ不思議セリ

暫住玉ウ 此時摺録ニテ米ヲ洗ヒ其鉢ニ而
飯ヲタキ玉ヒシコトモ有シト云

平子村ノ南丸茅野山庵室ノ段

丸茅野山ニ庵ヲ結ヒ棲セラレ度由ヲ村人ニ乞玉ヒ
此所ニ庵ヲ造ルヘキ事ハ信楽院ヘ窺ヒ可然ト相
議シ信楽院ヘ申ケレハ信楽院ヨリ役人ニ窺ヒ玉ヒ御
領御代官義村奎左エ門殿ヘ祈ヘ許シ有テ元禄十二
年ノ秋両村人寄合丸茅野山上ニ二畳鋪ノ柴ノ
庵一日ニ成就ス西ニ向テ一窓ヲ開キ入口南向常竹

ト木ニテ角違ヒ下文字ニ結テ戸ニ片トリ庵ノ東南
ニ丁斗隔テ水ヲ求メ庵ノ前ニ引半月形リノ泉水
ハ功獨水ニナソラヘ是ヲ樂ミ杜若ホウツキヲ植南天
ヲ好ミ玉ヒ川原村菅生氏ノ通家櫻井氏ヨリ乞需メ
是ヲ植玉ヒシ也

或日尼人一兩人伴ヒ上人ニ參詣シ路ニテ数珠ヲ落シ
念珠ナク十念ヲ授ラン事ヲ申ケレハ上人其道ニテ
落サレタル念珠ハ是ナルヘシト与ヘ玉ウ尼人大ニ不思議セリ

熊野村ハ平子村ト同リ信楽院旦越ニテ上人皈依一統
也此村ニ名有瀧有七月朔日ヨリ八月八日迄熊野権現
ノ祭礼ノ日迄諸人詣テ瀧ニテ病切ノ行ヲナス昔シ
吉野皇居ノ時近國ノ山伏綿向山ニ登山シタル時ノ行
場也蒲生家ノ時松尾村華藏院ノ阿闍梨立願ニ
七晝夜絶食ノ行ヲナス澄禪上人モ此所ニ七中夜
瀧ノ元ニ立行ヲ修シ給ウ

大石自落合谷

丸茅野山落合ト云谷ニ大石アリ上人是を見給ヒ村人ニ
是ヲ庵ノ本へ上ケテ得サセヨト乞求メ玉ウ村人ノ云此石此
山へ揚ル事小村ナレハ熊野平子両村ヨリテモ上ル事
得カタシト云上人ヨシトノタマヒ或夜中ニ此石庵ノ边
ニアリ村人寄合是ヲ見テ大ニ不思議セリ是ヲ施餓鬼
石ト呼フ上人此石ノ上ニ施餓鬼ヲ修シ玉ウ

仙人未敷蓮花

仙人来臨石ト云有當山ニ折々法道仙人來リ上人ト法話有

熊野村ハ平子村ト同ク信楽院旦越ニテ上人皈依一統
也此村ニ名有瀧有七月朔日ヨリ八月八日迄熊野権現
ノ祭礼ノ日迄諸人詣テ瀧ニ打レ病切ノ行ヲナス昔シ
吉野皇居ノ時近國ノ山伏綿向山ニ登山シタル時ノ行
場也蒲生家ノ時松尾村華藏院ノ阿闍梨立願ニ
七晝夜絶食ノ行ヲナス澄禪上人モ此所ニ七中夜
瀧ノ元ニ立行ヲ修シ給ウ

大石自落合谷

丸茅野山落合ト云谷ニ大石アリ上人是を見給ヒ村人ニ
是ヲ庵ノ本へ上ケテ得サセヨト乞求メ玉ウ村人ノ云此石此
山へ揚ル事小村ナレハ熊野平子両村ヨリテモ上ル事
得カタシト云上人ヨシトノタマヒ或夜中ニ此石庵ノ边
ニアリ村人寄合是ヲ見テ大ニ不思議セリ是ヲ施餓鬼
石ト呼フ上人此石ノ上ニ施餓鬼ヲ修シ玉ウ

仙人未敷蓮花

仙人来臨石ト云有當山ニ折々法道仙人來リ上人ト法話有

テ善哉念佛門ノ師先ニ行法勇猛ヲ嘆ス其隨喜ノ
余リ未敷蓮華ニ莖ヲ授与シ是ハ靈鷲山ニ出生セル
木蓮樹ヲ以テ造レル持蓮華也得カタキ法器ナリト上人
ニ附屬シ給ウ上人恭敬戴拜シ祕藏シ玉ヒ此寶品ハ
後古谷ヘ携ヘ行給リ後麓ノ流ニ墮貝ノ古キ水ニサレ
シヲ拾ヒ瑞華ノ二字ヲ自剛テ額トシ庵ニ掲ケ給ウ
二字ノ心ハ未敷蓮華ヲ得玉ヒシヲ以也

本間養軒誠上人懺悔

時ニ本間養軒ト外療ニ名高キ醫師アリ獵ヲ好ミ吹
矢ノ名人也筒ヲ携ヘ平子山ニ参リ上人ヲ拜シ給ウ上人ノ
曰今日ノ獵ハイカニ歸ル時道ニ隱シ置レタル吹矢筒ヲ忘
レ給ウナト云給ウ本間其道ノ傍ツ、シノ木ノ元ニ隱シ置レタ
ルヲ知り玉ヒシヲ大ニ驚キ其吹矢筒ヲ携ヘ来リ上人ノ前ニ
テ蹈打ステサンケシ十念ヲ授リ日課ヲ請ラレタリ信有テ
參詣ノ輩ニ八十念ヲ授ケ玉ヒ不信人ハ知リ玉ヒテ十
念ヲ授ケ玉ハス

テ善哉念佛門ノ師先ニ行法勇猛ヲ嘆ス其隨喜ノ
余リ未敷蓮華ニ莖ヲ授与シ是ハ靈鷲山ニ出生セル
木蓮樹ヲ以テ造レル持蓮華也得カタキ法器ナリト上人
ニ附屬シ給ウ上人恭敬戴拜シ祕藏シ玉ヒ此寶品ハ
後古谷ヘ携ヘ行給ウ後麓ノ流ニ墮貝ノ古キ水ニサレ
シヲ拾ヒ瑞華ノ二字ヲ自剛テ額トシ庵ニ掲ケ給ウ
二字ノ心ハ未敷蓮華ヲ得玉ヒシヲ以也

本間養軒誠上人懺悔

時ニ本間養軒ト外療ニ名高キ醫師アリ獵ヲ好ミ吹
矢ノ名人也筒ヲ携ヘ平子山ニ参リ上人ヲ拜シ給ウ上人ノ
曰今日ノ獵ハイカニ歸ル時道ニ隱シ置レタル吹矢筒ヲ忘
レ給ウナト云給ウ本間其道ノ傍ツ、シノ木ノ元ニ隱シ置レタ
ルヲ知り玉ヒシヲ大ニ驚キ其吹矢筒ヲ携ヘ来リ上人ノ前ニ
テ蹈打ステサンケシ十念ヲ授リ日課ヲ請ラレタリ信有テ
參詣ノ輩ニ八十念ヲ授ケ玉ヒ不信人ハ知リ玉ヒテ十
念ヲ授ケ玉ハス

念佛三昧發得し玉ひいつし、既得後を悉く
神遊自在ノ心眼ヲ以見玉ひし凡人ノ不思議ヨリ
モ参詣ノ人多ク上人是ヲ厭ヒ給ヘトモ快青ノ日ハ
平子参リノ日也と里ノ諺ナリシ時ニヨリ参詣ノ人ニ
上人ノ曰今日ハ追付供養ノ物登山ス暫ク待ヘシト
仰ラレシニ果シテ其供養ノ物持来リ是ヲ施シ給ウ
載テ下向スル者マ、アリ

供養物施ノ下

隨身ノ僧國飯

一人隨身ノ弟子有勢州神戸人平子村ニ住シ後又
熊野村ノ庵ニ棲リ或日上人此弟子ニ告給ウ近キニ
厄病有是ヲ除カントナラハ早ク國ニ歸ルヘシト曰果シテ
其年兩村ニ厄病有テ人多ク死ス上人未前ヲ知リ玉ウ

信樂院ニ輪番

正徳三年癸巳五月十七日在心上人十七回忌信樂院ニ法會
有上人來臨此時歸リニ藏王村米石二十念ヲ授ケ玉ウ
圓茅野山十六年在庵ノ内只此一度信樂院へ来リ給

念佛三昧發得し玉ひいつしか乾坤被れ盡て

神遊自在ノ心眼ヲ以見玉ひし凡人ノ不思議ヨリ

モ参詣ノ人多ク上人是ヲ厭ヒ給ヘトモ快青ノ日ハ

平子参リノ日也と里ノ諺ナリシ時ニヨリ参詣ノ人ニ

上人ノ曰今日ハ追付供養ノ物登山ス暫ク待ヘシト

仰ラレシニ果シテ其供養ノ物持来リ是ヲ施シ給ウ

載テ下向スル者マ、アリ

供養物施ノ下

隨身ノ僧國飯

一人隨身ノ弟子有勢州神戸人平子村ニ住シ後又

熊野村ノ庵ニ棲リ或日上人此弟子ニ告給ウ近キニ

厄病有是ヲ除カントナラハ早ク國ニ歸ルヘシト曰果シテ

其年兩村ニ厄病有テ人多ク死ス上人未前ヲ知リ玉ウ

信樂院ニ輪番

正徳三年癸巳五月十七日在心上人十七回忌信樂院ニ法會

有上人來臨此時歸リニ藏王村米石二十念ヲ授ケ玉ウ

圓茅野山十六年在庵ノ内只此一度信樂院へ来リ給

乙平子村へモ十六年山住ノ内一度下山ノ事有シ也
古知谷請待并

圓茅野山ヲ去リ給ウ段村人十念

正徳四年^{甲午}年勢州松坂人在京中川常宇念佛門皈依ノ人
也上人ノ行狀ヲ傳ヘ聞遙々當山ニ參詣シ上人ニ拜謁シ古知谷
彈誓上人ノ冥地阿弥陀寺山ノ事ヲ告此処ニ移リ玉ハシ事ヲ願ヘ
リ上人曰此地モ日ニ増參詣人多ク是ヲ厭ヒ里遠キ山居ヲ問玉ヘハ
常宇則阿弥陀寺住僧ニモ述テ迎ヘ奉ルヘキヲ約シテ歸レリ
正徳六年^{丙申}十月五日ニ又常宇阿弥陀寺ノ僧一人ト共ニ招

請ニ来レリ是ヨリ信樂院靈岳和尚ヘハ歌一首ヲ以テ告知セ玉
ウ遂ニ行道ハ西方大原ノ阿弥陀寺山ニ暫シ宿カルト申
送り両村ノ人々ニモ此地ノ化縁ツキヌル事ヲ告別レヲ借ミ玉ウ
庵ノ有物ハ焼捨玉ヒ同年十月廿二日下山発足孫右衛門方ヘ立
寄村人ニ暇乞ノ十念ヲ授ケ給ヒテ人々ニ頼ミ玉ウハ庵ノ
植木ハ堀取テ他ニ移シ元ノ山ニナスヘキ由ヲ告玉ヒテ十六年
御山住老若男女暫目送り涙ナカラニ相別レ村人三人ハ古知
谷迄送ルヘク出タリ上人都ニ移リ玉ウ事近郷ヘ聞ヘケレハ

乙平子村へモ十六年山住ノ内一度下山ノ事有シ也

古知谷請待并

圓茅野山ヲ去リ給ウ段村人十念

正徳四年^{甲午}年勢州松坂人在京中川常宇念佛門皈依ノ人
也上人ノ行狀ヲ傳ヘ聞遙々當山ニ參詣シ上人ニ拜謁シ古知谷
彈誓上人ノ冥地阿弥陀寺山ノ事ヲ告此処ニ移リ玉ハシ事ヲ願ヘ
リ上人曰此地モ日ニ増參詣人多ク是ヲ厭ヒ里遠キ山居ヲ問玉ヘハ
常宇則阿弥陀寺住僧ニモ述テ迎ヘ奉ルヘキヲ約シテ歸レリ
正徳六年^{丙申}十月五日ニ又常宇阿弥陀寺ノ僧一人ト共ニ招

請ニ来レリ是ヨリ信樂院靈岳和尚ヘハ歌一首ヲ以テ告知セ玉
ウ遂ニ行道ハ西方大原ノ阿弥陀寺山ニ暫シ宿カルト申
送り両村ノ人々ニモ此地ノ化縁ツキヌル事ヲ告別レヲ借ミ玉ウ
庵ノ有物ハ焼捨玉ヒ同年十月廿二日下山発足孫右衛門方ヘ立
寄村人ニ暇乞ノ十念ヲ授ケ給ヒテ人々ニ頼ミ玉ウハ庵ノ
植木ハ堀取テ他ニ移シ元ノ山ニナスヘキ由ヲ告玉ヒテ十六年
御山住老若男女暫目送り涙ナカラニ相別レ村人三人ハ古知
谷迄送ルヘク出タリ上人都ニ移リ玉ウ事近郷ヘ聞ヘケレハ

日野町通郡集ヲナシ信楽院ニ皈依人集リ今ヤ遅シ
ト待ケルニ其群集ヲ成スハ見給ハスミテ先ニ是ヲ知リ
玉ヒ綿向馬場ヲ横ニ切レ裏町通り上野田林ニ出玉ヒ鏡
ノ宿ヘ出此濱ヲ渡リ堅田ニ揚リ是ヨリ平子ノ送り人ハ
歸シ玉ヒ古知谷ヨリ迎ヒ来ケレハ叡山ノ麓ヲ越テ大原
ニ着玉フ町筋ニ出シ群集ノ人々ハ裏町ヲ過行玉ヒ
シヲ聞ヘ空ク家ニ歸リケル上人諸人群ヲナシ崇敬ヲ
厭ヒ玉ウ御心兼テ相州ヨリ參詣人多クナレハ折々処ヲ

替ヘ山居閑棲ヲ事トシ玉ウ群集ノ中ニ信心ナク只

信見ヲノミ集ル人多カリケレハサモ有ヘキ事也
信楽院人々待ナ念ヲ并

大原古知谷庵住ノ段

古知谷阿弥陀寺ノ後ロ四五丁ヲ隔テ坂ヲ登リ僅ノ
庵ヲシツラヒ置ケリ炉一ツヲ作り狭ヲ容ル斗ニ過ス後
參詣ヲ止メ麓ニ垣結シノヒ玉ヘ共止事ナキ高位モ此山ヘ
ヨチ登リ法縁ヲ請ハセ給ヘハ上人ノ御心ニソミ給ハス本意
ニタカヒヌト上人常ニ崇敬ヲ厭ヒ我無德ニシテ諸人ヲ

日野町通郡集ヲナシ信楽院ニハ皈依人集リ今ヤ遅シ

ト待ケルニ其群集ヲ成スハ見給ハスミテ先ニ是ヲ知リ

玉ヒ綿向馬場ヲ横ニ切レ裏町通り上野田林ニ出玉ヒ鏡

ノ宿ヘ出此濱ヲ渡リ堅田ニ揚リ是ヨリ平子ノ送り人ハ

歸シ玉ヒ古知谷ヨリ迎ヒ来ケレハ叡山ノ麓ヲ越テ大原

ニ着玉フ町筋ニ出シ群集ノ人々ハ裏町ヲ過行玉ヒ

シヲ聞ヘ空ク家ニ歸リケル上人諸人群ヲナシ崇敬ヲ

厭ヒ玉ウ御心兼テ相州ヨリ參詣人多クナレハ折々処ヲ

替ヘ山居閑棲ヲ事トシ玉ウ群集ノ中ニハ信心ナク只

信見ヲノミ集ル人多カリケレハサモ有ヘキ事也

信楽院人々待ナ念ヲ并

大原古知谷庵住ノ段

古知谷阿弥陀寺ノ後ロ四五丁ヲ隔テ坂ヲ登リ僅ノ

庵ヲシツラヒ置ケリ炉一ツヲ作り狭ヲ容ル斗ニ過ス後

參詣ヲ止メ麓ニ垣結シノヒ玉ヘ共止事ナキ高位モ此山ヘ

ヨチ登リ法縁ヲ請ハセ給ヘハ上人ノ御心ニソミ給ハス本意

ニタカヒヌト上人常ニ崇敬ヲ厭ヒ我無德ニシテ諸人ヲ

化度スル法器ニアラス只自己ノ往生ヲ期シ閑棲ニ念佛
シ命終ヲ爰ニ定メンニ爰モ其地ニアラストノタマヒシニ
終ニ享保六年^辛二月四日壽六十七歳ニテ往生成シ
玉ウ折シモ平子村太田清左エ門上京ニ而不計上人ノ在命
ニ拜謁シ命終ニ逢奉リ直ニ此事信楽院ヘ向告来リ

古知谷ニ人々行

ニ移謁シ命終ニ逢奉リ直ニ此事信楽院ヘ向告来リ
靈岳和尚平子熊野旦中ヘ厲知有テ両村日野皈依人十
八人信楽院方弟子二人急キ此濱ヲ越堅田ヨリ叡山ノ麓
ヲ越ヘ古知谷ヘ其日ニ到リ常宇相談ニ而御葬式ヲ営ミ

茶毘ノ御骨ヲ分ケ日野ニ歸リ平子南丸茅野山ノ庵ノ地
ノ傍ニ骨ヲ納此時ノ事常宇カ書殘サレタルハ命終成
給ヒシ翌日茶毘有シト左ニハアラス平子村ヨリ参著迄
ハ上人ノ御遺骸ニ手モサヘス其俣ニアリテ僊化ノ御姿ヲ
崇ミ奉リ阿弥陀寺和尚常宇ト共ニ相議シ御葬式ヲ
営ミ茶毘ノ御骨ハ捨ヒ分テ日野ニ歸ル常宇ハ享保四年
己亥年刺髪ノ儀ヲナシ上人ノ御弟子ト成墨染ノ身トナレリ
サルニテ上人常宇ニ御遺言アリテ骨ヲ淨キ流ニ流シ失ウ

化度スル法器ニアラス只自己ノ往生ヲ期シ閑棲ニ念佛

シ命終ヲ爰ニ定メンニ爰モ其地ニアラストノタマヒシニ
終ニ享保六年^辛二月四日壽六十七歳ニテ往生成シ

玉ウ折シモ平子村太田清左エ門上京ニ而不計上人ノ在命
ニ拜謁シ命終ニ逢奉リ直ニ此事信楽院ヘ向告来リ

古知谷ニ人々行

靈岳和尚平子熊野旦中ヘ厲知有テ両村日野皈依人十
八人信楽院方弟子二人急キ此濱ヲ越堅田ヨリ叡山ノ麓
ヲ越ヘ古知谷ヘ其日ニ到リ常宇相談ニ而御葬式ヲ営ミ

茶毘ノ御骨ヲ分ケ日野ニ歸リ平子南丸茅野山ノ庵ノ地
ノ傍ニ骨ヲ納此時ノ事常宇カ書殘サレタルハ命終成
給ヒシ翌日茶毘有シト左ニハアラス平子村ヨリ参著迄
ハ上人ノ御遺骸ニ手モサヘス其俣ニアリテ僊化ノ御姿ヲ
崇ミ奉リ阿弥陀寺和尚常宇ト共ニ相議シ御葬式ヲ
営ミ茶毘ノ御骨ハ捨ヒ分テ日野ニ歸ル常宇ハ享保四年
己亥年刺髪ノ儀ヲナシ上人ノ御弟子ト成墨染ノ身トナレリ
サルニテ上人常宇ニ御遺言アリテ骨ヲ淨キ流ニ流シ失ウ

ト云トモ後其御骨川瀬ニカ、リ有ヲ厭ヒ又捨ヒ上テ古知谷
ニモ塚ヲ築クト有茶毘ノ時此処ニ有逢者ハシラサリシニ
後四方ヨリ庵ノ空紫雲襲タルト告知セタリ丸茅
野山ニモ骨ヲ納メ奉リシ時異成□□ヲシト也其后此地ヨリ
参リ合ヒシ人廿人モ有シニ僅ノ庵セマシトモ思ハサリシヲ
ヨリノツトヒテ不思議ノ思ヲナセリ

此時信楽院靈岳和尚ノ書殘給ウ小傳記アリ其文ハ

略之享和三年昇譽上人代其文章文字ニ訂

正ヲ乞テ石ニ刺シ丸茅野山庵ノ踪蹤不朽ニ建之

日野平子熊野旦越願主也

上人ノ石像ハ明和六年^己七月九日納骨塚ニ並ヘ石室

ニ安置願主生阿上人

平子村地藏堂ハ眞入和尚在世ノ時ハ眞入庵ト人ヨリ呼フ

上人僊化ノ後瑞華庵ト呼テ澄禪上人ノ木像ヲ安置シ

例年二月四日ノ法會ヲナシ瑞華ノ額御袈裟一衣錫

ト云トモ後其御骨川瀬ニカ、リ有ヲ厭ヒ又捨ヒ上テ古知谷

ニモ塚ヲ築クト有茶毘ノ時此処ニ有逢者ハシラサリシニ

後四方ヨリ庵ノ空紫雲襲タルト告知セタリ丸茅

野山ニモ骨ヲ納メ奉リシ時異成□□ヲシト也其后此地ヨリ

参リ合ヒシ人廿人モ有シニ僅ノ庵セマシトモ思ハサリシヲ

ヨリノツトヒテ不思議ノ思ヲナセリ

此時信楽院靈岳和尚ノ書殘給ウ小傳記アリ其文ハ

略之享和三年昇譽上人代其文章文字ニ訂

正ヲ乞テ石ニ刺シ丸茅野山庵ノ踪蹤不朽ニ建之

日野平子熊野旦越願主也

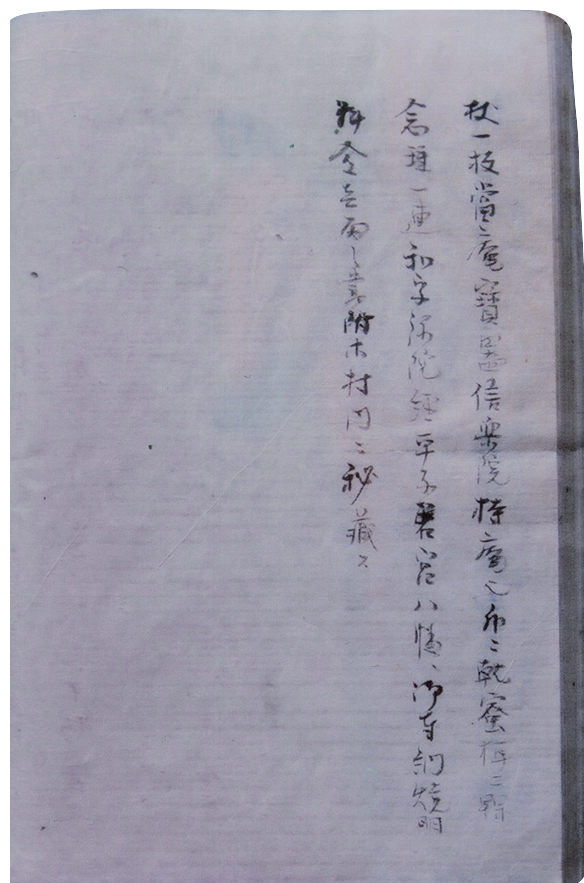
上人ノ石像ハ明和六年^己九月九日納骨塚ニ並ヘ石室

ニ安置願主生阿上人

平子村地藏堂ハ眞入和尚在世ノ時ハ眞入庵ト人ヨリ呼フ

上人僊化ノ後瑞華庵ト呼テ澄禪上人ノ木像ヲ安置シ

例年二月四日ノ法會ヲナシ瑞華ノ額御袈裟一衣錫



杖一枝當庵寶器信樂院持庵也外ニ乾蜜梅ニ
念珠一連和字弥陀經平子若宮八幡御奉納燈明
料金壹兩之寄附等村内ニ祕藏ス

杖一枝當庵寶器信樂院持庵也外ニ乾蜜梅ニ□
念珠一連和字弥陀經平子若宮八幡御奉納燈明
料金壹兩之寄附等村内ニ祕藏ス

※以下二丁及び裏表紙、画像不備のため割愛する。

進譽上人澄禪大和尚錄記 中

「表表表紙
題 簽

(白丁)「表表紙
見返紙 (白丁)「遊才 (白丁)「遊う

南天山蓮忞菴精進社進譽上人澄禪大和尚錄記 卷ノ中

西方極樂淨土へむかわしめ給へと。祈願ありて。澄禪守り本尊とし給ふと申也。然るに澄禪は段々御修行功なりて。天和元辛酉年八月廿七日より閑東へ趣たまひて。江戸芝三縁山・廣度院・坊舎常照院へ着府あり。證舉大僧正雲卧。五重兩脈承り。精進社進譽澄禪和尚と号するなり。然るに世の常の「學僧とは異なり。螢雪の詠やうの吏はし玉わずして唯禪那称名のみを緯とし給ひて。跡を林藪に遁れんことを欲し。終に。嚴林を出て。兎角名にをふ靈山。灵地を順曆し。安禪の勝地をためらふこととせり。

貞享元甲子年二月五日又々三縁山を立出たまひ。相州下足柄郡。曾我原村。塔ノ峰嚴崙に「住み給ふ。常に水を汲み。薪をひろいて。衆につかへ玉ふ。暑寒共に木綿麻の衣。直綴一衣を着し。嚴窟に入て勇猛精進に勤學し給ふ。寔に世の凡の人の及ぶ所にあらずといへり。翌年春二月八日近邑の辺りに藥師如来まします。破損せしかは澄禪老此尊像をせおいまいらせ

て。江戸中において日々助力をこひ請給ひて。再建し玉ひぬ。同年初秋五日に曾我原村の山谷田と云所に嚴窟ありて是へ移らせたまひ。其窟の躰は入口の高さ七尺斗り也。内には茅を鋪きならべ。端坐し稱名怠らずとなへ給ふこと一夏なり。霜月十四日の曉きに孫佛山の守護神来現し玉ひて。過去拘留孫佛の御舍利大小三十粒授け給ふ。澄禪和尚は誠に天地を拜し歎ひ給ふこと「不斜。遙に程を経て此所の岩に寶篋印の塔を建立ありて右の舍利十五粒を納めて陀羅尼を御自翰なし給ひて。今に現存せり。又貞享二乙丑年五月下旬鎌倉より長谷寺觀音大士へ願簞にて。我何卒阿彌陀如来尊躰を今世にて奉拜後の世の為にせんと。百日日参有し處に。或時道すがらの畠に農夫。田葉粉の虫を取居しを見玉ふに「多くのむしを害する躰。さながらいたわしく思めされ。夏の頃なれば。團扇を持たせら

れ。あはぎたまひながら懺悔戒三偏と十念唱へ給へは。茗菰の虫何方へか残らずさりしとかや。其后は今に至りて煙草のむし生ぜずといへり。それより九月上旬には百日日参も皆済にて直に富士山へ詣て玉ふ。絶頂へ登り給ふに。げにや三國無双の靈山なりし故。淨土の百寶蓮花臺に。擬て。大身の如来を今世に見物の御願をなし玉ひ。名號を唱へ玉ひ。命終西方極樂淨土に導き給へとしきりに念佛をとなへ玉ふに。不思議や。東のかたに嗅根の音聲聞えしに。遙なる空中に。嚴飾。微妙にみがき出せし斗の五重の寶橋行列せり。赫々たる白雲是を捧げたり。橋の大きさは。洛陽の三條。五條の橋に似たり。第五級の橋詰に十四五歳斗りに見へし「童男一人立止りて手に拂子やうのものを持て。澄禪を招き給ふ。是に随かつて進みなんとし玉ふに一會萌じて。第貳会に渡る。飄然とかの寶橋の中間に安坐すれば。忽ち此。寶橋に澄禪を乗て空を飛行する。東の方をさしてとび去事。凡拾里ばかりもやあらんと覺ゆ。空中に飛立ず。こはいかなるゆへならんと。左右を顧るに。富士の絶頂に信ずる大身の如来宝蓮に座し。光輝赫々として澄禪の頭に照し玉ふ。澄禪ごとき篤僧も身の毛いよだち恐悦して地にひれ卧。禮敬し玉ひ。佛恩を謝し奉らんがために。合掌せんとするに。悲咽し物言ことを得ず。時に應じて阿彌陀如来容を動かし。忝けなくも莞尔と傾笑し給ふ。其御聲は世上においてはたとふへきやうもなく。稽首し奉るに。俄然として澄禪おほへず地に落てたゞずみ給ふ。其時しかく。と其所を見給ふに。實に曾我原の塔の峯の麓にてぞありける。故に。元の嚴窟に入。なをも益々修行ましくする也

評にいわく。右の奇特のことありしも。百參満日の事なれば。願望成就の記しに富士山とみせしめ給ひて。御佛教の事なるべし。難有貴きとも申も愚か成へしと爾云。

去程に。澄禪は又翌年三月中旬に富士山。絶頂に昇りて。かへすぐも幾ほども。便りなき世のありさまなり。只死せんより外はなしと。命を投ちて當來の種を植んと。念佛唱へ給ふに。天人爰にくだりつゝ華を散して。天の羽衣の袖をひろげて。雪霰れを防ぎ給へり。

又其所へ空躰仙人來現し給ひて。善哉。よいかな。澄禪。法門の龍の像な

りと勇猛を讃嘆して美敷き、蓮華二莖を授け玉ひて、^〇のたまわく、是は天竺の、靈鷲山に生ずる、木蓮樹をもつて造れる、持蓮花なるぞ、是天竺におひては觀音の像を彫刻^{ほりきざむ}には、此灵樹をもつて持物の蓮花をつくれるなり、殊にいみじき功德とおもへり、かるがゆへに人に是を求めさする事希^{まれ}なり、最も崇め奉るべき靈樹なり、然れども國王の制度あるゆへ、其得る事甚だ希なるもの也、我昔より已來、身を離さずして持奉る所也、今是を汝に附屬するなり、慎んで散て、かるくしく人に見する事なかれ、随分尊敬し奉るべきもの也と也。

此空跡仙人一名法道仙人也、是觀音大士の化現にして、世々其名を現せしもの也、日本に遊曆して、觀音の靈場を草創なる事、所々に数多有るなり、先づ摂津の國兔原郡に佛母摩耶山^〇切利天上寺ナリ是人王四十代天武天皇、御建立也、澄禪和尚、先年摩耶山において籠り給ふ時、法道仙人來りて、毎度佛法の説釈ありしと也、又相摸の國、曾我原村塔の峯阿彌陀寺の灵嶽の巖窟に数年御坐なり、是彈誓上人の始めて嶮所を開き給ふ處にして澄禪も此所に修行せしもの也、依て當山におひて、勤行^{ごんぎやう}せしものには、時々、龍神の來巖せし事と也、或時は龍神澄禪より佛器を属し給ひし也、又遙かのちに至て、彼法道仙人より賜りし、持蓮華壹本、竜神へあたへ給ひしと也、右持蓮花の形ちと申は、筆のこたくにして、其色赤黒く、長さ五寸八分、未敷蓮廻り壹寸五分、莖本とり九分半あり、目方四斤五分あり、扱又貞享三丙寅年四月八日塔ノ峯庵室を^〇結ぶ^{少し分りがたし}、勤行には禮讃文を唱へ給ひて、法道仙人よりの教へに任せ、藥師如來の本尊を念し給ふと也、去ば日本を伊弉諾尊^{いざなのみこと}おのころ嶋と名付給ふ、其後瓊々杵尊^{にぎはひのみこと}、豐葦原と付玉ふ、又其後神武帝日向の國宮崎より、大和國橿原郡に移り給ふ時、大日本国と名付給ふ、此日本は瑠璃世界なり、即ち此國に生ひ出る物、総て何に寄ず、草木、國土迄、藥師如來の借地免に^〇住せしゆへ、安託て、各々藥師を信仰すべきものなり、藥師を念ずるものには、其利益こふだいなる事也と也。

孝靈帝の御時江近の國地さけて、一夜のうちに水海と成る、同夜に駿河の國に富士山わき出る、此不二山の大権現本地は則ち藥師如來也、又曰く、

允恭帝の御時、江州比良、白鬚大明神、湖水に出玉ひ、岩上に腰かけ魚を釣玉ひし處へ、異國の僧來り申に、此比叡山におひて、今年より三百ヶ年終る頃に至て自ら日本へ出生して佛法を弘く諸人に教化したく候間、山の内地面賜るべくと申す、白鬚答へて曰く、此湖水三度迄、葉の木原と成事を知る故に佛法を弘め教化せしなば、我此大地にて魚つる事なりがたきゆへ、其をは差免しかたしと答し處へ、何方ともなく、赤地の衣を着せし僧來り曰く、自から此地に住事久し、およそ八億八万歳余に及ぶ、此豊原にかぎらず、一世界皆我地面なり、去るに依て、守護する所也といつ、白雲に乗じて比叡山へ飛去る、爰を以て、異國の増は、法華經八軸を比叡山へ石のから櫃に右の八軸を納め入、鎖前を落し土中に埋め置き申て曰く、我今年より三百年終て後、此地へ出來し、左りの手に鍵を握りて出生するなり、其時土中に埋めし石のから櫃鎖前を^〇ひらきて堂塔を建立し、法華經を弘め、諸人に教化をなさんといふて、鍵を持て僧は、異國へ立歸り給ふと也。

其後天平寶字年中に、坂本に叡山開祖、傳教大師、鍵を左りの手ににぎり、出生ありしと也、又其後、桓武帝、延暦元年山城の國、平安城へ^〇うつらせられ候時、傳教大師、法華經を都の地中にしき給ふなり、依て都の地を毫度踏し者は、極樂世界にむま^〇るといへり、比叡山延暦寺の本尊は藥師如來なり、此國、総て瑠璃世界にて藥師如來の御地免なりしゆへ、人王四十五代聖武天皇の御時、藤原淡海公に勅使ありて、日本國國々に國分寺と名付し寺壹ヶ國に壹ヶ寺是あり、東國は坂ノ上田村丸勅使なり、西國は吉備大臣勅使なり、中国は藤原淡海公、九州は大野東人磨勅使なり、則ち國分寺本尊は皆々葉^〇師瑠璃光如來と定り、當代迄はある處なり、又相摸國日向山の本尊も藥師如來にて行基菩薩の御作にて坂ノ上の田村摩呂の御建立の地なり、北條時政の母、此藥師如來へ信仰厚くして、何卒我いまだ一子もなく、御方便をもつて、一子御授け下されと祈りし処程なく懷妊し何の差支りもなく一子を出生せり其子則北條相摸守時政是也、澄禪和尚も^〇度々御參詣ありし所也、又下野の国日光山御本地も藥師如來也、相殿摩多羅神、山王天權現、東照宮、三社納め奉る、則本尊は藥師如來也、又

參河の国風來寺峯の藥師を慎じ二菩薩十二神を安置す。是東照大権現は藥師十二神の内、虎御前童子の化身なり。日光山奥の院寺ヶ崎藥師如來は弘法大師の御作なり。又足利義氏も藥師如來を建立して信し給ふ故。ついに「天下將軍と成、武運長久なりぬ。又聖德太子大和國法隆寺初て御建立の時も、才一に藥師堂より御建立なし給ふ也。北條・足利・徳川・藥師十二神の内の化身也とぞ。天下泰平、武運長久昔より能納りしは此三家にとゞまると也。外にも將軍家あれどもつゞきがたしと也。

さて又曾我村塔の峯の阿弥陀寺は、彈誓上人の始て開き給ふ御山なりしゆへ、澄禪和尚爰において修行し「たまひし時三峯山へ御參詣の砌秩父三十三所廻りたまひ翌年元錄元戊辰正月廿八日事なりしが、塔峯阿弥陀寺を去りたまひて坂東三十三所を廻り給ふ先差し入る處人皇六十五代花山院は十六歳にして天子の位に入十九歳にして位を避給ふ寛和二年八月廿二日夜潛に王宮を脱れ出往て西山の花山寺へ入給ふ其路安部晴明が宅を過る暑の夜の事故庭に在り忽ち仰ぎ見て驚き曰く天に大變の象を呈す是天子位を避の兆し也」と其時帝王この言を「聞て笑て走り入給ふ時に晴明大裡に入て事を奏す群臣驚き觀るに帝王在さず即ち此夜花山寺に於て髪を難し法の諱を入覺と付させ玉ふ悉駄太子も十九歳にして雪山へ登入也斯て五畿内外の靈場を遊歴して又紀州熊野山へ御參詣の砌那智山に入て三年の間だ山を出ず種々の苦行を為玉へり則ち法皇那智山を出て大和國長谷寺に入諸國行脚の御願を立て三七日夜宝前に持念し玉ふ其満ずる日の曉に至りて香の衣の」老僧來り親へたり法皇の頂きを摩て汝有為の榮花を厭ひはやく無為に正路の皈く也是を隨岳する所なり我坂東八州において身を三十三所に現す其能灵場を知る者は河内の石河寺の佛眼上人也彼と俱に坂東巡禮を始行して偏に道俗男女を導くへし誠に後生善處の方便には此才一の修行なり是故に彼焰魔大王は德道上人を冥府に請し順禮功德の印璽を賜ひしぞと告訖て帳中に入玉ふ法皇夢覺て叡感あり」仍りに石河寺御駕を輒し佛眼上人弁光僧正良應上人元密上人傳光僧都滿願上人威光上人都て八人の御同行にて正暦元年庚寅の奉初て鎌倉へ御下向あり佛眼上人を御先達として坂東八州を巡礼し玉へり即ち仏眼上人は熊野権現變身也と賜ふ

澄禪上人には坂東第一番鎌倉大藏谷觀音院杉本寺行基大士御作なり即ち上人當山は才一番所し故一夜修行動たまひて曉れは実爰に退りて三浦郡久野郷海前山岩殿尊「觀世音大士行基大士御作也」德道上人開基名越郷安養院田代堂惠心僧都手親五尺四寸の千手觀音大士作り給ふ

第四鎌倉長谷寺觀音大士大和長谷寺觀音同木同作德道上人舛なり五番足柄下郡飯泉山勝福寺觀音は赤梅檀御衣木を以て毘首羯磨作る所三國傳來當地に安置す太政大臣弓削道鏡人皇四十六代孝謙帝大唐楊州の鑑眞和尚壬生寺開山なり始て傳來時に「獻上せし觀音大士坂東五番の本尊也」第六番愛甲郡飯上山長谷寺行基大士開基同作觀音なり一之宮寒川社國分寺第七番大住郡金目山光明寺本尊小磯濱より出現の觀世音大士なり

第八番愛甲郡妙法山星谷寺本尊觀音大士行基大士御作也武藏國児王郡金佐奈神社一之宮國分寺拜し奉りて是より比企郡平之郷へ行て第九番都史山慈光寺役行者開基なり」

都史山麓の里には蝮蛇多し昔は螫る者数多有し或時一人の農夫八月初め頃稻田蒔時兩足を喫れし忽ち膝より腫れ上り毒氣惣身に弥りて一足も歩みし事かなわらず早日も西山に入其内に早晚景に及しゆへ実苦觀音經唱へられし処凡百遍よ唱へしに何方ともなく白髪の翁來り我れ汝か此所において毒虫に喫れしを救わんが為に此處へ今來りし也汝か手を差出すべしとある時則ち農人の手の内へ猪と云一字を書與へ是にて汝が惣身を撫よと必ず苦痛を除くべしと言終りて何方へか退り給ふ」農人は撫るに隨て本復す我家に歸りて休足して夜明を待て都史山觀音大士の則ち化身なりと思ひて則其日都史山に參りし道すから立より喫れし處に凡三尺五六寸余りの蝮蛇二筋死て有しを見て弥夫都史山へいそぎ御禮參りいたされしと云なり

聖德太子 蝮災を除る御詠有

行前に鹿子班の虫飼は 山だつ姫に有としらせん 猪の事なり」

此歌を行さきに唱ふれば蝮蛇の巢に入とも螫れさることなりと也

夫より武藏の國那珂郡韞貫原の郷千手谷山口村金乘院行基大士の開山なり諸州を遊化して此地にいたりて日すでに没ぬすなはち錫を樹下にかけて終

夜から念数なり給ふに丑の刻ころにしりたる藪の中に千手陀羅尼をと
ふる聲あり行基是を「あやしみ和して具に誦するに異香薫じ靈光輝き千
手眼觀音尊紫雲に乗じて樹上に影向したまひ不動毘沙門弁財天まし
ける行基未曾有の感たへずなをかの陀羅尼を念誦しまた樹下を匝りて瞻禮
し奉る乃し曉のころに至てくだんの尊容みなかくれたまへり越て彼影向の
靈木を伐てよもすがら感見し奉る尊容を摸し彫みなかく此地に度生の方便
を施したまふ仍て此地を千手谷と稱す

其後弘法大師一夏安居のあいだ千手の密軌を修せんと西の溪につひて闕迦
水をいのりもとめんとしたまふにたちまち地より鵜一羽とひ出て跡より
浄水涌流るゝしかつして後灵水常に「是を服して病を痊すもの多しと也
時に元弘三癸酉年五月新田左中將義貞卿上野国々義兵を存し旗を武州韓貫
原金乘院本尊觀世音宝前において一紙の願書を捧げ朝敵退治の武功を祈り
玉ふ一夜大將義貞夢に觀世音馬上にありて御手に弓矢を授けたまふ義貞夢
覺めて大きに岳悦ありて勇て関戸の陳に馳向ふ然るに不日に相劔鎌倉北
條「一家を亡し震襟を安じ奉る也

十番比企郡岩殿山正法寺觀世音大士靈山なり上人當山におひて修行勤たま
ふに子の刻過る當山の草木を照したまひて頂きにおひて音樂の聞ゆる事丑
の刻過迄有上人は余り有難く明の夜も勤めたまふ處に又前夜の比より諸天
善神二十五菩薩にいたり溟滓に顯れ見へ給ふ事寅の刻半過迄音樂はしゆし
やうなる事誠にのべかたき事なり「されは當山の沙門に昨夜より夜前の後
即ち御嘶しなされし処其時沙門の申さるゝには當山は元善知識の僧御參の
節は二十五菩薩諸天善神に至り顯れ出現したまふことは迄も数度承りしこ
と也また在家男女のもの仁義禮を守り一切懺悔いたし通夜いたせしものは
其夜に音樂をさく山の峯佛菩薩下に見へず共光明照草木晝中よりも見へ
わたりしと云事「諸方より参り通夜せしもの数度の内にも音樂聞ものもあ
り又同座に連り居るものにも聞へず見へすと云事もある也岩殿山正法寺觀
音不動毘沙門三昧逸海上人の御作なり坂上田村將軍利仁公開基今此野本里
利仁山將軍塚神祠有其後零落に及ひ然るに鎌倉平政子二位禪尼公天下安全
御祈禱願所にして建立遊されし所也

十一番横見郡岩殿山安樂寺本尊聖觀音「吉見兵庫守本尊安置の所也と云事
也

十二番吉野郡岩槻華林山慈恩寺千手觀音慈覺太師開基也毒蛇栖て人を害せ
し故に降伏したまひて彼蛇身を辨才天に祠る

十三番江府淺艸寺本尊聖觀音宮戸川の澳に至て魚網に罹て亥ノ刻に至り光
を放ち上り玉ふ

然る処澄禪上人久々にて江府に來り夫々の近付の家へ入來にて御逗留其内
近辺の諸堂へ参り給へしに「そこ爰にと七八日逗留にて江府を退り給ひて
十四番久良岐郡但久郷瑞應山弘明寺觀音は行基大士御作弘法大師開基也時
に養老二戊午年に行基大士當山に於て白蓮乱飛して山上古本の間に散落を
見給ふに忽ち神人出現有白狐に乗る人は灵鳥に乗天竺の善無畏三藏法師日
本に生れて今此地に來りて蟠石を加持して石を圍に陀羅尼書と見へたりと
言終りて退り給ふ其時行基大士は「鳥に乗しは熊野権現白狐に乗しは早
玉尊命なり兩社出現境内に祠る也夫々澄禪上人は武州廻り終りて十五番上
野國高崎の城下を廻り白石山長谷寺觀音は行基大士柳靈木作給ふ

役行者今此白石山へ來り人通わさる嶮山なり其半稜に少し平地に水涌出て
諸々に葉艸生す行者岳悦し給ひて麓へめぐりて刀根川水底に一丈余の白石
あり則此白石を彼山へ持來る変行者の力に及ずゆへに御山におひて三七夜
に「經陀羅尼を讀誦したまふに満座の夜不動明王八大童子出現し玉ひて刀
根川水底に一丈余も有し白石此場所へ來り即ち出現の不動明王八大童子行
者作り賜ひて彼白石上へ安置し給ふ上州一之宮伊香保社國分寺廻り玉ふ

十六番同國群馬郡五徳山水澤寺本尊觀世音藤原淡海公孫子藤原魚名公孫子
川邊豊沢公孫子高辺佐大將家成公之女伊香保姫守本尊也「御尺ケ二寸八分
の像高麗國慧灌僧正持來國司高邊家成公獻し賜ふまた家成女伊香保姫授
けたまふ其母三十八歳にして病死父家成は信州更科大夫宗行が娘を家成後
妻に定め一人男子を産み夫よりして継母前ノ三女を妬み我親類更科次郎兼
光と謀りて三人の娘を更科へ引入れて赤城山へ連れ行麓に於て殺さんと山
持十人取まきて家來三人の者は目附いたして差越され三人の娘を「大鉢
にて正面に二人娘を切割慙なるかな空しく其同場に居る伊保娘も同やう

に持たる大鉄りは空中にとひ寂初切殺したる手に持し鉄ふしぎや空中に飛退り黒雲出大風吹渡りて其場忽ち晦闇となりぬ彼三人の目付のもの、背中の様に切疵を請し神札の罪おそるへき疵口より虫数多生して悩み終に三人の者苑山^{やまかせ}持の者共は其場にて命を失なわんかと思ひ逃去りぬ其場に伊保姫^{いほひめ}斯る處に異形の人出來る漫^{まん}たる利根川流水を左右へ「排^はき地を歩むがごとく也汝か命を助けしは我汝に授し守り本尊也と言給ふ也姫は鰐^{わに}の口を連れて伊香保の里に隠れ忍ひ入也則姫の兄南都左官を勤て勅免を蒙り南都住居也中納言家定公^{くんだん}件の子細を注進に及しに其後家定下向して信州更科次郎兼光悪徒に組するもの共亡し又後母は死を許給ひて宇津尾山奥に捨其後此山を姨捨山といふ則姨の魂魄石と成と云高麗國渡し惠漢僧止勅命に依て彼守り本尊を」水沢寺建立安置し賜ひて中納言家定公御建立の寺也一之宮伊香保社國分寺赤城社貫前社

是より下野國宇津宮明神國分寺都賀郡出流山満願寺本尊千手千眼聖像弘法大師一夜に彫刻賜ふ奥之院岩洞靈像自然石にて十一面觀音背向の立像也第一之大日岩屋第二之觀音岩屋三岩屋女人禁制の難所故鉄釘にて登りて数箇所に按橋渡り岩角登り岩屋口に小堂有り旅人衣服萬重と成金錢^{きんせん}迄^{いた}此堂に置たすきをかけて蠟燭を燃^も岩屋入口不動兩尊曼荼羅^{まんだら}岩窟に堀顯して此間壺丁斗り行し所に胎内^{たいない}潜と云漸く頭を入る斗りの穴へ手をさしのぼして向ふの岩を探り執へ夫より頭を人身を縮めて潜り通り拔出^{ぬげ}噴々^{ひんく}鋪岩^{ふがん}崛あり廣さ拾丈余高さ七丈もあり此岩に四天王護法善神釈迦如来文殊普賢諸大菩薩阿難迦葉等諸大羅漢天龍八部衆等透間^{すきま}なく岩谷の四方上に彫列^{ほりつら}たり其羅漢尊者肩膝踏渡^{かひひざあふみ}て華鬘^{けわん}環珞^{わんらく}帷蓋^{はいがい}等また胎内潜り越て此所岩屋有り見るに高さ十四五丈廣^さ二十丈余りあり大師護摩壇彌勒菩薩淨刹藥師十二神般若十六善神上には雲乘十萬八千佛奥には大師阿字觀の後容^{うしろすがた}あり其外無量壽佛形有り聖天岩屋越して不動岩屋越て文殊岩屋普賢岩屋又毘沙門岩屋越て大黒岩屋五ツの岩屋弘法大師遺跡也」一之宮日光山大已貴命奉拜夫より東照大權現様三代將軍大猷院様奉拜諸堂諸社廻りて十八番禮所補陀落^{ふた}山^{さん}中禪寺本尊立木以勝道上人千手觀音作り給靈像也

十九番河内郡荒針里天開山大谷寺本尊岩山に堀り造し千手千眼聖觀音一丈

六尺立像罪惡の重きものは尊容を拜する事かなわず只常くの岩山と相見へ御堂は則ち山なり内陳は山の外後ろの方「屏風を立廻したるかき岩下に水涌出て自然と流れ川也昔此内に毒蛇住て時々毒水流此水を吞附は人は勿論鳥獸虫の類に至る迄忽ち死に畠畑へ流五穀も草木も枯涸^{かれほ}民家の憂へ朝夕に及ひし所也時に湯殿山の行者三人の沙門來り里人に曰く此大谷の山中に毒蛇住て毒水流る我等降伏^{かうふく}の秘法を以て汝らが患を除へしはやく山谷へ案内すへしと云里人山谷の流筋へ登り高き岩山の一方に千手千眼觀音左りの方に不動右に毘沙門「自然と邊りに顯れたり光明赫奕^{かくやく}として金色の如し里人斯る不思議を奉拜事也我らは近在に住なから此尊像を知らず雲泥相違^{うんでい}奇特也荒針郷老若男女感涙袖を絞らざるものはなし是方湯殿山行者を貴ひて菩提の道に入者多かりしと也是大谷寺の寂初也又毒蛇を弁才天と崇む則住池あり今其池を清淨蓮池と云也

式十番下野國芳賀郡益子郷獨股山西明寺「本尊十一面觀世音大士御胸の間熊野權現神筆納尊像也依て勅に行基大士開基也其後弘法大師岩崛に在て安詳として修行し賜ふ獨股を山に納冥場也

二十一番常陸國久慈郡八溝山日輪寺弘法大師湯殿山より鹿嶋明神へ趣き八溝山の峯より水八方に流れ落仍て八溝山と号す狩衣を着給ひし神人左右各出來り此嶺は十一面觀音利生方便の淨土也と則二神の教に順ひし十一面尊像二肘手親五尺」余りて彫刻して安置し玉ひて此峯に兩社建立し給ふ山王大權現日光大權現弘法大師此嶺に於いて日想觀に住し玉へは山上に日輪現前して一山全く一輪相となす故に伽藍^{からん}構^{かう}營^{えい}後大悲宝閣と称して總て日輪寺と号す故に玄翁和尚は越前國荻^{おぎ}邨^{むら}の出生能登宗慈寺峩^い山^{さん}禪師に奥義に豁達して悟道大德の禪眼也奥州會津へ志し給ふ時比八溝山へ登り大悲の宝前に於て日夜禪觀に住しけり余るに一夜の「夢相に本尊毘沙天の形に現して玄翁和尚に告給ふは那須野の石妖怪^{あやぐわい}石は常におふくの有情に害あり汝修禪の道力を以て彼石の災ひを除へしと御手の念珠を授け給ふすなはち玄翁夢さめて寄異の靈告を感じ頻りに宝前を辞し去て山を下り黒羽川を渡り那須野の原毒石を尋ける處に忽ち一人の老農夫來り念比に彼毒石の叟^{そう}を語り玄翁を毒石の所へ案内す即ち大悲の靈告を感じ有情の「為に慈心を起て石に

むかひて一偈を唱へ所持の珠数にて打玉へは妖石碎て火焰を吐しことふしきなり故に玄翁大和尚濃州今津宿妙恩寺開山に成給也

廿二番同國久慈郡天神林邨妙福山明音院佐竹寺正曆三壬辰年花山法皇坂東御順禮のとき八溝山へ下向し給ふ処衆多の神等出迎へ念比に法皇に對して曰く往昔日本武尊東夷征罰し玉ふ時爰に天神七代靈を祠り夷の賊を退治を「祈り玉ふ」しより我等大神を輔佐して今に東國に安寧を衛然るに星移り物換り土人も神の在すを知らず社も鳥獸住と成り神冥無がことし幸ひなるかな法皇の臨光斯に無為の宝殺を初めて天神七社の奉為に無上の法味を餉給ふ語訖て神使は皆化し去ぬ時尔法皇御襟に掛玉ふ大悲の像を從僧に與へ是は聖德太子の彫給ふ十一面尊像也汝等早く此地に安置して神慮の法樂に備へ即ち從僧元密上人法皇の勅慮を「奉」新に六尺余の立像を彫みて太子の御作胸の間に納め一字搆て是を安置す元密上人は當時の開基也常陸國一之宮鹿嶋神社大洗磯前藥師國分寺浮津明神大杵大明神

夫より二拾三番笠間城内佐白山正福寺本尊千手觀音毘沙門天の像鉢作俗に云毘首羯磨の作矣

二十四番眞壁郡雨引山樂法密寺本尊延命觀音御長五寸二分銅像鉢也惠心僧都の行化「新彫五尺二寸の本像を以て彼小像奉納胎中矣樂法守藏居士は大唐の人なり日本へ渡此地に來り尊像安置の地を求めんとす尔処藤の衣を着たる者有り是は婆藪仙人なり曰く夫此山に昔羅漢あつて過去戸棄佛の舍利を納る所此故に天龍八部恒に守護菩薩聖衆影響したまふ所也傳言樂法守藏居士は一切經輪藏之元祖大梁傳大士之化現なりと云

夫より此靈場を退きて「二十五番筑波山大御堂中禪寺知足院護持院也夫此御山は天地開闢の古へより天神地祇降灵の地也延暦元壬戌年德一上人の開山也其後弘法大師の結果なり大御堂千手觀音伊弉諾尊伊弉冊尊于託宣によりて弘法大師彫刻之西峯男鉢權現東峯女鉢權現稻村峯天照大神月讀ノ尊安座蛭兒尊子原木峯素戔鳴尊者渡峰鎮座父母二神兄才四神今麓に六社はあり」女人是を崇め祭り給ふ社堂なり

二十六番筑波郡小墅里南明山清滝寺は筑波權現降遊之砌行基大士草創の地也本尊聖觀音行基大士の彫造賜ふ建立の灵地也山の高き一里半登り諸堂近

邊に水を求んと有所に伊弉伊諾の尊出現ありて天の鉾を持て行基に何れ地由なし爰において鉾前にて其地を突玉へは忽ち地裂て清水涌出て南北兩方へ落流て此二神元と陰陽神灵也「北流陰に開て朦々南瀧陽に開て明かなり行基大士此に淨刹を剏南瀧の清明なるを取て南明山清滝寺と号す行基大士後二百七十余年終て花山法皇御順禮の時此靈場の因縁を聞し召され斯る嶮岨の山頂にあつては老若の結縁普く及すと御堂を山の麓へ移し玉ふ是尚大悲者の内鑑に叶ひ実に永世の大利益なり又麓へ移せし後筑波權現天の鉾を持て突水口ふさがり「一水も出ずこの水を三ヶ野原神社へ移し玉ふ土地より脇に出其地名を水戸と号流れを泉川と云歌にも三ヶ野原脇て流るゝ泉川と有り三ヶ野原明神社小宮にてあれ共栄り森中に清水脇出流るゝ所泉川と云ふ澄禅上人御覽じて三里歩みて村松寺虚空藏菩薩を伏拜み夫々水戸御城下一見也下総國一之宮香取神社國分寺藥師如來拜し夫々二十七番銚子飯沼山圓福寺弘法大師開基灵場也」本尊十一面觀音海中に出現の尊像は漁夫兩人の感得伽藍初建立の檀主也甚た能景所とて海上の詠め能也

廿八番同國滑河山龍王院境川朝日の渕に出現の十一面觀音長一寸二分龍宮の鑄造閻浮檀金の聖容也其節領主小田宰相將治の開基建立堂也長サ二尺ノ尊像法橋定朝彫御胸間に納奉る処也

人皇五十四代仁明帝承和五年戊午の夏炎暑の時候倏ち變じ氣寒日に増て嚴冬の如し霜降て「水凍りて老若兒人寒山里に雪積りて草木の葉は枯落て百穀皆々種を失ふて民家日追て衣類食乏しくして餓するもの多く有つる故に領主小田宰相將治是素々仁義の君子にて常に人を憐むの志しありしか將治もちから及はらず此上は慈覺大師を請待して法門に入深く三宝皈依の將治斯民家の天災に罹り老若の餓死を見るに忍びず九穀を出して施行を布倉庫傾けて金錢を散せとも猶「扶助けのちから普く及わらず共寢食を忘れ肺肝を碎くが若し夫人力にあたわさる時は佛神の冥助を請の外なし嘗て聞妙法蓮華經は法王髻り中の如意宝珠にて世に萬宝を雨すの德アリト願くは此經か勝能を以て民家の為に災厄を除んと新たに一字の淨室を構へ法華千部の請會を設け同二十八頓寫を行するところにこの大法會の満日に至り異相の少女忽然とあらわれ「宰相將治の前に立り將治是を怪み見て曰く

女姓は何人なりと問ふ小女答て我は朝日前と云汝民の為に家財を盡し我身を忘れて他を恵ふこと実に世間の仁君子佛家に取ては菩薩の行なり我今汝が志願を助けんと遙かの海底を凌ぎ来れり此地の小田川の渚より乳色の靈水涌出る也汲與へて民家の患ひ避よと云て立去て小田川の方へ走行ける將治跡を逐て河岸に至るに忽ち女姓の行方を失ふ然る処に八十有余の老僧一人舟に乗て河岸に立玉ひて老僧將治に告て曰く閻浮檀金の大悲の像今此小田川の渚より出玉ふ汝至心に此像を持念せは所願必ず成満すへし又この渚より涌出る甘露の乳水を嘗よと倏舟も老僧も見へず茲に於ひて將治思案先の小女も今の老僧も同く大悲の化現ならんと感涙を流して「尊像を拜し又涌出る乳水を掬するに其甘味に譬ふべきものなし試に枯たる草木に注げは仍りに周葉緑りの色を出す即ち民家に教へ汲與ふるに飢たる者は氣力を復し死たるものは蘊生斯て將治一字の香室を建立して小田川朝日の渚より出現にて龍宮より賜りし処故龍王院朝日寺と号す即ち靈水を佛の教へに依て滑て此地を滑川と云也

廿九番同國葛飾郡千葉海上山觀音院千葉寺」生身觀音説法の處なり勅號す三界六道青蓮千葉寺天平二庚午八月十五日行基大士武藏の國を経て當國の海辺を過玉ふ池田の郷に大いなる池あり行基池中を臨見玉へは水金色の梅檀の香りあり彌視に中央に雲氣集り雲中に微妙の聲有て三界六道皆令解と脱と聞ゆ行基奇異の念ひを為けるに倏ち風吹雲散じて見れば千葉の青蓮華一莖生し水上に出て清香を送る華已に圓満開敷して其中に十一面觀音尊像光明赫奕として説法し玉ふ行基敬て眞容を拜し奉つれば圍遶の諸聖衆と共に雲に乗じて西天に退り玉ふ爰に於て行基其眞容を摸して一丈六尺の十一面の尊像を彫み一字の蓮宮を構へて大悲の宝刹を剏玉ふ彼の青蓮華を禁庭へ獻じ吏の由を具に奏聞し奉る聖武皇帝叡感の餘り三界六道青蓮千葉寺と云震筆の御額下し給」頼朝公石橋山に於て大庭三郎景親等と戦ひ敗北して僅に六騎となり眞名鶴が崎より房州へ渡り玉ふ北條の一族三浦一統各前後を争ひ渡りけり頼朝公洲崎明神へ社參して終夜武運の栄を祈り玉ふ其夜明神の御告に。源は同じ流ぞ石清水只せき上よ雲のうへまで。頼朝臣有さのあまり幣帛を捧げ返歌を奉る

源は同じ流の石清水せき上てたへ雲の上まで

斯て加勢の先陳には安西三郎景益」上総介廣常千葉介常胤なり各々上総の市原を發してます千葉寺に陳宿あり頼朝公宝前に通夜あり四海安寧を祈玉ふ時に武蔵常陸上野等の諸軍の味方馳加わり終に平家を討亡して天下源氏に一統し玉ふ是単に千葉寺觀世音の冥助也建久三壬子年の春千葉介常胤に頼朝公の命あつて伽藍の再宮舊觀に復す白旗明神頼朝武威像造祭千葉介常胤像是當山の鎮守なり」上総國主実飯野廻り埴生郡玉前神社國分寺

夫々三十番望陀郡平野山高藏寺人皇四十一代持統天皇の御宇德義道人開基なり聖觀世音菩薩は阿薩婆梢へ出現の靈像御尺四寸の尊像也後に行基大士新に彫み大像を壹丈八尺簞奉る小像を御胸の間に納奉りしなり彼小像は元と百濟國の王是を貢米り聖德太子御持なりしが太子後に大職冠鎌足へたまわる」鎌足へ賜る此像に皈依し功名朝廷に高ふして官録群臣に超進む中臣を改め藤原姓を賜りて永く家の元祖と成り然るに公の子孫に至り榮繁也鎌足御遷化の後此尊像東國は仏法未た無か如くの処教へ化き給ふとて東海道山道才一の比類無き大木枝葉四方四里木根本は海近き地所ゆへ枝八分海上向則此阿薩婆梢へ西江州より飛來り出現し玉ふ其頃當地に老人の道人」あり德義山人と号す艸庵を締び日夜法蓮華經を讀誦せりある夜に夜叉神現れ德義山人に對て曰く淡海國滋賀郡藤原家の本尊縁に隨て阿薩婆の梢へに永らくの住所也汝はやく精舎を構へて安置せよ我は乾闥婆王なり又汝は山城國葛野郡に祭りし平野明神の再來成ぞと德義山人阿薩婆の木本邊所に行見れば」枝に巍然として在しける德義合掌禮したてまつれば尊像合掌に飛移り給ふ乃に此地を占して結界し偏く自村他郷を募り不日に大悲の香堂を造り來現の靈像を安置し奉る是當寺の草創の因縁なり

三十一番同國埴生郡笠森大悲山楠光院傳教大師東國に遊化して天台の法門を弘め玉ふ頃當國埴生郡に至り尾野上上の郷過給ふに映茂り」たる山の樹間より金色光明の衝出る所あり則ち大師怪みて登り見給へは山上に又宝形の山あり其地の周匝百間余高サ八九丈其山の頂上に十一面觀世音光明をはなちて立せたまふ大師敬て近く寄見るに上には楠の枯れたる木株の外に曾て奇異なるもの有退き降りて遙に顧みれば又大悲の尊像歷然たり更に

登りて木株を熟見るに自然と」十一面觀音の形なり即ち大師木株を禮拜持念して仍りに座光の莊嚴を具へ仮に草堂を經みて尊像の為に雨露をふせぐ此ゆへに大悲山楠光院と号する也

三十二番同國夷隅郡鴨根邨音羽山清水寺は熊野權現乘跡の處也圓通大師影響の山なり本尊彫造道場開基は傳教大師也發願慈覺大師の勲功也京都の音羽に擬し」伽藍の製を為ものなり

枳笠森楠光院より傳教大師は此地に移り玉ふ時路に惑ふて廣野に出日も暮往來のものもなし夜もはや戌亥の刻にも錫を掛べき木蔭もなし然る處へ老人薪を脊負明松を持來る大師近く寄て道を問ひたまへは老翁のいわく此は常に野干横行して動もすれば旅人を悩す事あり大徳は其患ひあらずとも今宵の露を凌ぐ斗りに」我ら貧しくなれとも住屋へ徒歸り俱に浴みし飲食して其慰榮り丁寧なり斯て夜も闌暫居眠夜明て見れば神の社に卧て主じ翁は影も見へず大師怪しみて尋ね覓るに鳥居に熊野權現と題す爰において大師感涙衣を絞り偏く山内を見行玉ふに山けわしくして古木うち茂り溪幽ふして地勢閑寂なり一方には東海を見臨み社頭に泉み涌瀧落て恰かも京東山」音羽の景に似たり乃し大師思へらく先の行叡居士と云るも今此老翁も共に熊野權現所變にして此に大悲の靈場を示すならんと社の傍らに菴を締び單に堂舎の榮構をはかる然るに大師埜庭の召に依て俄に錫を京城に還し志願の遂ざるを憾み給ふ尔後慈覺大師は傳教大師の行跡を尋ね來り先度に居住して手親觀音の縁を作り一字を構へて是を安置し玉ふ即ち」音羽山清水寺と号す

三十三番安房國長狹郡補陀洛山那吳寺人皇四十四代元正天皇の御宇觀世音修法の壇上にげんじて親り行基大士に示したまふ我日本の補陀洛山なり養老五年の九月天皇御不豫に坐して名醫美藥の妙方を盡し普く天神地祇に祈り所ある諸山高僧驗者各祈念丹誠を抽すれども曾て御悩和平したまわす」行基大士重て別勅を蒙り千手大悲の軌を修し玉ふ然るに本尊壇上に示現して親り大士に告玉ふは是より東海百五十里を過安房國那吳浦に至て日本の補陀洛に祈なは天鉢速かに平安なるべしと也大士靈告の旨を奏聞あり頓て東海に發錫し玉ふ也其後房州那吳の浦遙かの澳に奇しき大船掛

り船中に数千の人聲して音樂簫鼓の響きあり夜は星のことく炬燵を挑け海表晝よりあきらかなり此怪異事に濱荻小湊との浦へまで漁舟一艘も出るものなしかゝるところへ行基大師南都より下向し玉ひて所々那吳の浦と云を尋るに國中の濱に曾て其地名なししかるに此浦遙かの澳まで法華經讀誦の聲きこゆこゝにおひて大士感解し玉わく先に大悲者のつけたまひし那吳の浦とは是ならんと試に迎請の印明を修し玉へは海中の樓船磯邊にちかつきて菩薩聖衆天龍八部その樓船の中に充滿たり大士は歎喜踊躍して船中の聖衆をはいしたてまつれば毘沙門天眷屬を率ひて船より一丈あまりの香木を出し直に行基大士に與へいわく南方補陀洛界教主汝がために此靈木を贈る早く千手千眼の觀音の像を作り此摩頭の山に安置せよと倏ち聖衆も船もはるかの澳中へ出しうち消うせ給ひて音樂の音聞もなくたゞ岸うつ浪の音のみなり行基大師感得の香木を以てたちまち千手の立像七尺に彫み岸頭の山頂に安置して偏へに帝玉躰安平を祈玉へは天皇の御夢に船に乗數百里の海上を涉り東國の海岸の山に登り大悲の尊容を拜すと見へさせ玉ひ御悩仍に快復し玉ふ元正帝御」感のあまり勅使を立て行基大士に命し不日に諸宇の伽藍を營り件の千手の像を安置しすなわち大悲者の教に任せて補陀洛山那吳寺と号すこれ當寺の艸創の因縁なり

順禮詠歌

補陀洛は余所にはあらじ那吳野寺 岸うつ浪も法の聲く」
隅納此山の地景を見るに經説の補陀洛に相似り山高く海岸に聳へ山下は南海の潮に淹り晝夜に岸打浪の音は梵音海の響きにして仍りに感信して拜し見て後に万國掌葉の圖を見るに天竺南印度の南の涯秣羅矩吒國の南秣刺耶山東布咀羅迦山那吳是に似たり華嚴經に云此南方に於て山あり補怛洛迦と名く當山觀音冥驗哀愍納受三日三夜修行」勤めたまひて夫々澄禪上人は山を下りて勝山一見し安房國一之宮洲崎明神社を拜みそれより國分寺北条を廻り佐貫を一見し佐倉城を廻り夫々成田の不動尊是は祐天僧正御心願の不動尊也上人此堂に一夜籠り給ふ水戸道筋々奥州倉棚城下を一見し白川城下へ出夫々會津城下虚空藏へ參り安達か原を見なから通り越て二本松下歩て須加川安積山三春の御城を左に見て」信夫の里福嶋こえて伊達大騎戸荷

田白鳥明神の社を拜し青根山麓に硫黄性涌然温なる湯なりし故に三四日呈をとめ夫より三里登り艸木なし亦二里登りて頂上迄流黄斗の山ゆへに青根山と云すなはち藏生大権現頂上に安置し給ふを拜し山路を下り元の湯本に立帰り來て夫音倉山觀世音田村將軍御建立の地なり巨理郷鹿嶋社名郷道祖神社熊野權現多賀社宮城野國分寺藥師如來を拜し白山權現牛頭天王兩社を拜し仙臺城下一見し青麻苧權現を拜し奥州一之宮塩竈神社を拜し松嶋景詠瑞岸寺富尾山觀世音野々山嶽觀世音石の卷湊觀世音和田の羽金花山辨財天を拜し山廻り藏王權現大黃小黃金山谷々を巡りて夫より氣仙沼大崎明神社太川觀世音立石岩谷の不動尊毗沙門天尊寺昔は衣の館安部貞任宗任其後藤原秀平出羽奥州兩國の大將後也今は中尊寺と云し大地寺なり衣川法正寺慈覺大師の開山也其後永平寺道眼禪師開基也

夫早常山元を尋ね麓より九三十五六丁登りし処大岩の上に白髮髭長き老人の老翁證禪に言曰く汝常山へ今日登しこと早前に空鉢仙人より告しより此所にて未居也是より三十八丁の間嶮しき岨なる処多し山頂の岩窟には昔鬼主住し又四方にも岩窟あり惡同從ふて族住して岩谷に石門の形造り数多惡き者此場に住故に民の米穀財寶を取集めし也是即ち地頭の力に及ばず田村將軍勅勘を蒙り惡鬼を責め殺破却し玉ふと也路すがら登り山も一里余也此山四方より登り道あり即ち此坂を云なり西の方に大威德明王安置の岩屋也則ち御尊像岩に切附玉ふ澄禪上人念佛唱へ拜し奉り是よりまた嶮しき岩をのぼりて岨なる所をつたひ八丁之間登りし処大石を積重ねて石門の形造實鬼住所見へたりかの岩窟の内には大日聖至不動明王毘沙門天愛染明王安置の岩窟也此堂におひて澄禪一七日の間修行化益念佛勤め玉へは實に浄土の意持せしかばなをも意を策まして勤給ふに老翁夜に入木実を持來りて與ふ澄禪上人は飲食なすものなりとてあたへ終夜方外へ出ず岩屋の内とは云ながら高き山頂にて寒氣の如くなれとも上人は是を敢ひなく勤めたまふに不動明王火焰をはなち玉ふにより岩窟の内温かなる事言にのべかたく上人は實に沈む涙を袖に絞りてしはらく間勤の聲嘸て出ず其後に修行化益も満座に至り上人岩窟を出南の岩屋を拜せんと山路を八丁はかり下りて見れば又岩屋ありのそき見れば軍屯利夜叉明王と岩に書玉ふを

拜し夫岨そなる山路横合に歩み道も程なく東岩窟へ出降三世明王を安置したまふを伏拜み亦横間に行前岩根をつたひ北岩屋大石積重ねて其内を指覗みれば悠陰上人は入口より手を差出しさくりながら其聲に念佛念法念僧の沙門今此堂へ來り金剛夜叉明王出現し給ふと光明眞言七遍唱へられし内に岩屋の中光明を照し玉へは岩に現したまひし故に此岩屋の中に於ひて念佛十万遍唱へ給ひて今夕一夜明し玉わんと也

然る処夜も深更に及びしかは上人は一心に只く念仏勤給ふ處に頂きより大石大木を岩屋の上或は出口などへ投捨大音に度々聞ゆ亦大木ねじ折或はひきさく音など又若女の位声あり老女の嘔ふ聲ありといへども唯々念唱へ行内檜明燈し岩屋の中へ來りて汝能も此岩窟に勤し事かな北陰暗闇にて隱なり即ち隱れ居がことし則ち北向影に安置し玉ふ金剛夜叉明王此本尊を古來より見奉しとそんなれとも拜み奉る者なしたまつて此岩窟へ入拜せんとすれども只岩斗り也と然る處澄禪上人は夜前の趣きを委細に老翁に云給ふに則ち老翁澄禪を嵩敬して給ふ然るに上人は是より行先くを尋給ふに即ち是々南部一家老住所十野辺越有て大樞と段々に廻り玉ふへしとありし処上餘波の御挨拶なし玉わんといたされは老翁澄禪に向ふて曰く汝此岩窟に於て今我に三貴戒十念を何卒授け玉へとある處に即此堂に置てすなはち授け賜ふ處に忽ち其所にて前夜の通りに光明を照し本尊実に顯れ給ふに老翁上人の徳通によりて是を拜したてまつる也其地を退りて上人は岩屋を出て嶮しき山を十五丁ほど下りてみれば異行なる白髪を振亂し鳥の羽を藤にて繋ぎわが鉢を捲かくし木の杖をつき茂し檜の下石に腰打かけて居たりし所へ立寄見ればすなわち澄禪上人を拜賀して申していわくこの山のつらなり山路はわが守護なす所なりわれこの間よりよく勤考なす処たゞ行脚の修行をなし未來西方浄土に生るゝ斗にあらず諸人を化益し或は亡者のため迷霊の爲化益して念佛の修行して廻りし國の一之宮國分寺につらなる國の灵山靈場のところをめぐりながら修行つとめのねん佛をなし入ところ也とて澄禪に向て三禮をなして何卒自らに三貴戒と御十念を授けたまへと也其所において澄禪上人直さま三貴戒十念さづけ給ふなり夫より山路を下りて南部十野邊へ出大槌にて一夜を明し夫より仙人

峠へ登り・鯨山大権現の社にて・空鉢仙人出現にてまみえ・上人は是る都て空鉢の差圖によりて行歩せられたり・是る五十丁の峠を下り・夫より・貳拾丁山田と云所あり・此所は海辺にて・平常・大綱を引・鰯を「漁する所なり・又鰯を煎あげて・魚燈をしぼり・そのかすを砂にまぜて莚がますに入て・こやしにする」と見えて・諸方へ廻船にて賣り出す所なり・鰯不臘の節は・其郡内々鯨山権現へ昼夜かぎり火を焚て・御湯を獻ずれば・感納ましまして・いづれの方ともなく・沖の方々大鯨鰯を追ひ來るゆへ・其時網を引といふ・上人は其所に泊られしゆへ「くわしくきかれしと也・扱又仙人峠にて空鉢仙人教には・宮古濱より田名部迄の間は惣して難風あり・殊に皐の初めつかたは猶更はげしく・さやうの時は・天竺國の文字にて・名號を書き・暴の浪にむかひて・諸法無我集滅異業娑婆詞・是を七返となへ・其時名号を水中へ入べしと・是水難の陀羅尼成と申されき・

扱上人は山路下りて・山田の里へ來り升や徳右衛門と「云家に頼み一宿ありて・明れば宮古濱へ五里來り人に・田名部船は此節居合せ候かと尋ねられ候へは・其人の答へに・いかさま田名部船・昨夕までは居合せ候得共只今にては・棄ヶ崎湊へ・神力丸と申船四五日已前に入船に御座候間・棄ヶ崎・小松ヤと申船問屋へ行て御尋ね可被成と教へ呉候ゆへ忝なしと申され夫々・小山を越て八丁行・棄ヶ崎湊へ行・小松屋に來り田名部神力丸と「云此節居合せ候かと尋ねられしに・亭主立出・何方より御出候ぞと云ふ・上人曰く拙者は江戸者にて候が・此度田名部・恐灵山へ参詣いたし度と罷出候に付・江戸商人衆賣買向の書状ことづかり・昨夜山田の升屋徳左衛門殿方に止宿いたし其方より承りて罷越候と申されければ・亭主聞て神力丸三四日の間は爰元」居合せ候間其内暫く當家に御逗留なさるべくと申に付・五日程・滞留の處・神力丸出船いたし打乗られ・段々と漕行しに・鮫白銀の沖にて大暴をはつし・次才く大浪うち・沖の東の方より大風吹來るゆへ・船頭衆中は・打驚き顔色面いろ青ざめて土色のごとし・其中に売人の若もの・大鉄を手に引提帆ばしらを「切つけんとす・其時上人立寄彼者持たる大鉄りをひとつり給ひ・其柱さるにおよばず・此暴風をしづむる法の咒術あり・水神へ祈念申べしといわれしを・聞入れずして又切

かゝるを・差止られしに・此御僧邪魔めさるゝな・われくが九死一生の場所なりといゝて聞入ざる處を押とぐめながら・其時上人は手を洗ひ・口中を清め・袈裟文匣を取出し「白紙壹枚に天竺の文字にて御名号を書玉ひ・水神陀羅尼を七返となへ・其名号を水中へ入れたまふ・其内に般若心經を三べん唱へ給ふに・不思議に大風大波早速静まりけり・船頭の者はあまりの事に嬉しさに・此御出家様には・弘法大師か・但しは慈覺大師にては御座なく候やと申にぞ・上人我慈覺弘法にてはあらず・只諸国修行の「非人坊主なり・又船頭いふに・是は誠に大師様此方の御僧様なりといゝつゝ帆を巻あげて歩とりなをし・西風となり昼夜帆を八分に上て・翌日酉の刻・大畝湊に着岸のふし船頭共申には私ども宿も御座候得共・見苦しき小家にて・其うへ子供多く・乳舌子御座候間この船主私らの親方に御座候へは御案内可申間御越下され御逗留被下候・猶圓通寺山へも「御案内可仕と申に付・船主安部屋重右衛門と申方へ御船上にて御泊りあり・

翌日・圓通寺へ参詣歩みし道も山路にて・次才に心恐ろしく・名も高嚴の恐靈山・まず本堂・本尊地藏菩薩を拜し給ふ・この御堂におひて・一七日の間・念佛修行あらせられ度座をしめ唱へ給ふ処に・初夜半比に至りなば向ふを見わたし給ふに・嶮山にして・岩上に美女数多「集り居て・麓なる数多の罪人を招くゆへ・罪人共・是を見てわれさきにと山へ掛あがるに・此山の草木はみなく劍のごとくにて・しかも下たむきに生たり・逆しまに生なれば・劍葉に身をさかれ・血み泥に成りながら・泣さけびつゝ漸に嶮岩に上りしと見えしかは・美女ども・頓て谷底へ下りて又まねく事前のことし・又罪人・谷下へおりると其儘・忽ち美女が「惡鬼となりて・大音聲に呵責していわく・汝ら・此所に來りても邪姪方「の色嘔やまずやと・鎖棒をもつて散ぐに打ひしぐ・罪人ども谷底へ逃行けは・たちまち兩方の山崩れかゝりてことぐく打碎かれ・落る所は深き谷也・其中に糞泥みちゝたり・獄卒うへより数万の罪人をつかみ・遙かに糞中に投入る・此ふんでいの中に長さ式三尺斗なる虫・すきまもなく「みちゝたり・其色形ち石童子のごとし・此むし上へより落る罪人を待受て悉く其身に取付・或は頭より喉に喰ぬけ・背より腹に喰ぬける也・其時取付たること糞の毛

を見るがごとし。罪人共糞の中より頭を出しけるしげなる息をつき。其息、悉煙りの如く立登り四方に散じて其臭き。たとふるにものなし。是則ち此所を恐る山、地獄谷といふ事なれば亡霊。餓饉道に迷ひ居る吏なれば。我日ごろの修行念佛此所にて衆生。亡霊済度すべきとて。一切如来心秘密全身舍利。寶篋印陀羅尼七遍唱へ。唵縛羅摩尼娑婆訶十遍唱へ。又光明眞言百遍唱へ候内。数多の餓饉。亡霊。来りて地獄の苦患今通れ。痺しと悦び来りしゆへに又々十念授け給ひしかは。皆いづく共なく失せ亡びしと也。夫より満座も過ぬれば山路を下りて。大叡湊安部屋重右衛門方へ再び歸りて。さいわひ青忝船商人の乗合便舟に乘て。青森の柏屋伊三郎と云船問屋へあがり一宿し。青森宇藤の宮。外の濱を廻りて三馬山へ行。是昔源ノ義經公。守り本尊の觀世音也。即ち此所に義經。辨慶。常陸坊。右三人の厩今に是あり。是を名付て。三馬山と云也。此処にて一夜を明し。夫より小泊りと云所に藤屋佐吉と云宿に。五日の間大雨降り積。うしゆへに滞留。夫より津輕一ノ宮。是往昔。岩城判官政氏の姫。亡霊を納し所也。此姫の名を。安壽之姫と申也。百澤宮。門弟に。津子尾丸霊宮。高尾岡宮也。古掛山。國上寺。猿ヶ山。神宮寺。夫より藥王院。弘前におひて四山五山と云大社大寺これ有り。夫より出羽の國鳥海山へ上り坂にて難所の所なり。藏王大権現を拜し夫より。金寶山。酒田山王社伏拜み大山の善宝寺。羽黒山。月山。湯殿山。大沼山。國分寺。藥師如来を拜し。山方。寺々廻り。鳥海社。山野寺。此寺は実に灵山灵ちと申事也。越後の國。蒲原郡。一ノ宮。伊夜比古社。國分寺。出雲崎より佐渡嶋へ船乗。一之宮。度津社。國分寺。檀特山へ登りて世尊拜し奉りて三日三夜の念仏修行竿崎渡りて。親不知。子不知の濱。七ふしぎを廻り楠崎。高田寺々社を廻りて。越中の國の宮崎。砺波郡。俱梨伽羅嶽。不動尊。一之宮。國分寺。射水社。加久彌社。富山社。寺。を廻り。立山へ登り。此立山にも。地獄有り。と云。夫々能登の國。羽咋郡。一之宮。氣多大明神。國分寺。能登比咩社。鳳至比古社。夫より崇慈寺。加賀の國。江沼郡。篠原社。挾野社。白山比咩社。一之宮。國分寺。小濱社。三輪社。加茂社。波自加弥社。大野湊社。氣比社。一之宮。磐座社。角鹿社。劍神社。今立郡。須波大明神。國中社。國

生社。坂名井社。三国社。國分寺。若狹の國。比古明神。遠敷明神。宇波西明神。一之宮。國分寺。美濃國。不破郡。仲山金山彦社。一之宮。國分寺。伊吹山。池田郡。養基明神。養老ノ滝。谷汲寺。飛驒の國。大嶽山水無明神。大津明神。荒城社。國分寺。信濃。佐久郡。英多社。長倉社。大伴社。生島社。水内郡。健御名方社。國分寺。安曇郡。穗高社。更組郡。佐良志奈明神。戸隠九頭龍權現。善光寺如来にて一七日念佛勤め給ふ。諏訪。甲斐の國一之宮。淺間明神。國分寺。山梨岡社。神部明神。甲斐奈社。箕武山。伊豆の國。箱根權現。三嶋明神。物忌奈命社。田方郡。湯原社。國分寺。阿波明神。駿河の國。淺間社。一之宮。國分寺。三方社。久能山。伊河麻社。安部郡。大歳祖社。遠江の國。敬滿明神。秋葉山。櫻池。牛頭天王。横須賀社。國分寺。周智郡。一之宮。小國神社。山名明神。入江里。蓮華寺。彈誓上人酒肉五辛を制斷し。また斎戒念佛堂建立の所也。此蓮花寺にて澄禪元錄二己巳年十一月八日參詣にて化益念仏六時の禮讃文を唱へ給ふなり。翌年午七月十六日迄此所に修行し玉ひ立退給ふ。夫々宝飯郡。一之宮。砥鹿社。國分寺。鳳来寺。額田郡。稻前社。加茂郡。野見社。尾張の國。中島郡。眞清田社。一之宮。國分寺。熱田社。津島社。志摩の國。答志郡。伊射波社。一之宮。國分寺。神乎多乃社。伊勢の國。幸名郡。多度明神。一見明神。朝熊山。内宮荒祭明神。瀧原社。天ノ岩戸。外宮豐受大神宮。鷹明神社。國分寺。都波岐社。伊賀の國。河部郡。一之宮。敢國社。國分寺。牛頭天王社。名波利圀。宝山。夫より上へ野。佐名古玉滝。深川。水口。夫より日埜。大窪早。竹林院へふたゝび歸りたまふに。已前の人とはみなく替りて漸。中井市左衛門夫婦智運。師友。のみ罷在。八月十三日に已前の因みはある故に。御入來被成候て御座被成候事なり。翌年七月十日まで御逗留被成候。ある時澄禪上人殊の外御笑ひなされ候ゆへ。智運夫婦のもの上人に何を御笑ひなさるゝと申し上げれば。上人のたまふには。あの雀が云には麦ほしてあるゆへ配てこうと云が笑しさにわらふなり。米ひとつかみもてきたれと仰せある故。智運。丸盆に米壺つかみ入。上人へ差出せは。御手のひらにのせ。雀を呼給ふに。早速三羽とび來り。上人の御手に乘て米をたべ

候なり。夫ゆへ智運も盆にいれある米を盆ながら差出し候得ども壹羽も來らず候故。又々上人」左りの御手にも□□共に米をのせられて御呼被成候へは、外の雀追く」に、とびきたりて盆の縁にとまり、ひらいし也。誠に、上人は善智識なりと貴みしかや。

ある時、中井は上人の木像の弁財天を授りて今に是ある處也。又其後、井田玄泉方へも右同様の辨財天を上人御持參被成て被下置候也。依て中井氏井田氏兩家には、澄禪上人の傳來寶物と奉拜戴し處也。又其後上人智運をめて仰せられ候には、清水早井田玄泉の屋鋪裏に菴室を作り住度と思ひしゆへ、どうぞ玄泉方へ行て此よしたのみ呉よかしと仰られ候故。智運承知いたされ、早速井田家へ參られ、玄泉へ右の御頼の趣き申入れ、澄禪上人も遠江國入江蓮花寺に御住所被成候處。夫々段々と近國御廻り被成、去秋御歸り被成候得共、竹林院和尚始め」此節にては壹人も前々の御存じのものはなく、それに付ては、下拙方は已前の因みありとて御越被下、御滞留はある處也。何卒菴室を御頼申と折入て被仰聞候處。玄泉心安く受合、随分御貸可申と申され、早速相取り智運大きに悦ひ歸り、右の趣上人へ被申候へは御悦ひにて候夫々。玄泉方におひては、同町久田六兵衛と申大工に相頼、玄泉、家辰巳の方、角みの畑に於て、一間に三間の」小家を作りて、此は元錄四辛未年七月十一日普請も出来に付同日上人移り給ひし也。只化益念佛六時禮讚唱へ給ふ。

其内に追々方々よりき、付日々參詣の人ありし也。上人は玄泉方へ湯に御入に御越の事もあり。又御機に入ざれば適に御越の事もあり。又御機嫌よき時は有がたき御咄聞せ下され候事もまゝ是あり。然るに、玄泉七女おもと、と申せし娘、當末の十八歳になりしを、常々御覽なされて仰られ候に此娘を何卒中井市左衛門方へ嫁に遣し被下候や左候は、澄禪身に引受御世話申たきと被仰しゆへ玄泉御喜に、思召有がたく奉存候。尚親類共へ咄し合仕候上、御返事可申上候と申上、先杉野神早井田治左衛門方へ咄しいたし、越川早正野源左衛門へも右の咄被致候處、何れも宜敷事と申され候故。上人様へ右の由申差遣可申と御返事申上候處則上人様中井智運」方へ御越被成、智運夫婦に右承知の趣御漸被成候處。夫婦諸共大きに悦び、左

候は、吉日を撰み取結申度と相取り候也。

然るに庵室におひては、日々參詣の人数多にて、不絶、懺悔三貴戒十念を授りに參るもの多く、其内には又長病人も本復いたし候ものあり。又迷し亡失は解脱し、死靈の類浮みし事数多なり。依て日々諸人近在は申に及ばず、遠路の人々參詣あまりに夥敷くして、後々は是を御嫌ひ被成候て、頃は元錄十丁丑年二月十四日七ツ時なりしが、上人玄泉方へ御入湯に御出被遊候節、被仰候には、我ら最早此所の水にもつき果候が何卒此所の方、山中へ行、竹木の下岩穴にても苦しからず、夫に住み度と被仰候故。玄泉申上候には、御意には御座候へ共此邊の村々在中に於ても御壹人は差置候所無御座候間、先々此御庵室にて御不自由には御座候へども、暫く御見合下され候、其内には宜敷處も御座候間、私御世話仕候と達て御止め置被申候に付、上人も暫の間は元の菴室に御座被成候。此節西空と申て、六十四歳なる道心者、禪門なりて、此人上人の日々の、御食事御世話申候人有候。

然る所数多の人々參詣の上上人に何卒御名號御書被下候と奉願候得共、只御断仰入られ御書なされず候が、ある時玄泉方へ上人御出の節玄泉佛前」過去帳とり出して、上人の前に置、硯箱差出し、玄泉上人にむかひ此過去帳に御名号を御書被下置候は、難有奉存候と申上しかは其とき、上人南無阿彌陀佛と、天竺國の文字にて名号、過去帳の金張つける所、表紙の内に、被為書賜り候、其時玄泉御名号の下に澄禪書と御載被下候やう奉願候と申上候得は、其時此澄禪善智識とも」相成候は、其時書可申と仰せられ御書不成候。

又其ノ年の七月十八日七ツ時に入湯に御出被成候て、玄泉に被仰候にはわれ永々世話になり住居所迄折角作り被下殘る所なく重々□□候得共、是悲此度は山入いたし度と被仰候也。是日々參詣不斷不絶御修行念仏日果おこたらせ候故の事はかりにても是なく、只若後家や、娘が參詣いたし候を御嫌ひ被成ての事なり。此に被仰候には、年月もはや七ヶ年の間居住致し、永々御世話に成候事、言語に述べかたく忝候へ共、何分是方は東の方に高山にていかなる岩根本の下にても不厭候間、修行念佛勤度存候間、どふぞ

玄泉案内いたし呉られと御頼み被成候。玄泉夫婦は勿論、召仕のもの迄も、御名残りを惜み御とゞめ申上候得共御聞入、無之候。落涙いたしなから、左候は、御意に「まかせ候わんと、ある日、玄泉上人の先に立、御案内にてまず、西明寺村へ至り、所々御一覽被成し処思召にも叶わず、山路を越て熊野村権現を伏拜み滝の不動尊へ参詣、夫々千本墅へ向て帰る處に、澄禅様の仰せには、向ふなる山のなかに、紫雲巒くとなり、是方彼なる山へ行申べしと被仰候故、平子村へさして山を登りし処上人被仰候には、「此所こそ靈山其地なり、山は西方にむかい、大きによき所なりと御歎ひ限りなく、近日來るべしと被仰、夫々四極山を詠めつゝ山下り、藏王権現、新宮の社、をふし拜み、御骨の薬師如來を拜し、二本木村淨福寺觀音、仁正寺清源寺々大日如來、天満宮、薬師如來、綿向大明神を伏拜み、日野西の宮、夫々夕陽にかたふきしまゝ、井田へ御帰り御入湯濟、御菴室へ御休足被成候也。其後再び平子山へ御移り被成大松の木の下に、西向にかやにて雨露を凌ぐために、しつらい下たより濕りきたらぬやうに荳草を散、其上に表鋪をなし、瓦火鉢、土瓶、土鍋、茶碗、勺、錫杖に、御袈裟、文匣、硯、墨、筆、瀬戸焼水指、俗名法名扣帳、鉦鼓たゞき、搗木の念仏なり、此御山へ引入給ひて、彌陀名号を唱へ給ふ也、まずしかし、水けなしには住居なりがたしとて水神を祈り給ふ、水神の陀羅尼を唱へ給ふ、庵縛嚙野娑婆訶七遍唱へ、彌陀心水沐身頂觀音勢至與衣被と御唱へ、又般若心經三遍、其後は念佛ばかり御となへ是あり候内実上人の御一德にて、清水たんくゝとわき出候也、此水溜りし処へ、蓮根を植給ふに次第に澤山になり見事に花咲し事なり、西方浄土に向ふ山にて彼岸の日中に「入日に向ふ山にして、是疑ひなき靈山成となり、又、ある夜、鬼の姿にて六角の桃灯を下げて歩み來るもの有り、上人詠めて十念を授け給ふに、鬼にはあらず、鬼灯草鈴なりになりし芷事と思へは、夢はさめにけり、然るに朧月に左右を見玉ふに、前なる石に腰をかけ、空躰仙人ありて、久々對面不致候間、澄禅を此所へ招きもうさんがために、先日紫雲たなびきしなり、併ながら、修行も半分は終り候へども、みなくは満申さず候間、近日の内に、又々修行可致と申されし也、偕又右前段に載る、西空道心者事、上

人様へ日々御上がり物も御世話いたされてありしが、上人平子山へ御越の後、井田屋鋪裏の庵室に諸色諸道具類も預り居られ、天氣能日には、陀鉢に行念佛斗りとなへありしが、終に宝永四丁亥年九月十八日に死去いたされ行年七十一歳也、依て平子へ御知せ申候處、上人御出被成候て、御懇ろに御吊ひ圓向成遊はされ候、猶又七日の命日にも御山におひて、御圓向被成つかわされ候、大徳の和尚様に御吊ひに預り仕合なる人とみなく申あへり

去程に澄禅和尚は、右前段申す丁丑年七月十七日己卯二月廿三日迄平子山に御座被成候處、御山を下り給ひて、同村清左衛門方へ御出被成仰られ候には、

（早）「遊才」（白丁）「遊ウ」

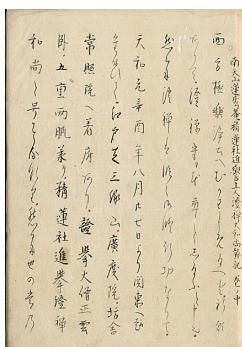
卷之中 終

卷主

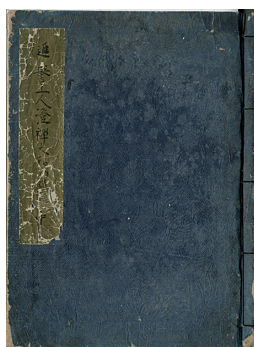
井田又兵衛

井田

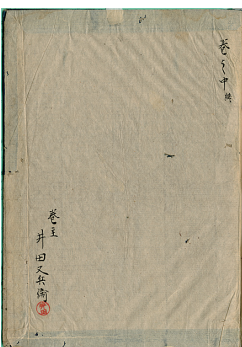
「裏表紙」
「見返」
「裏表紙」



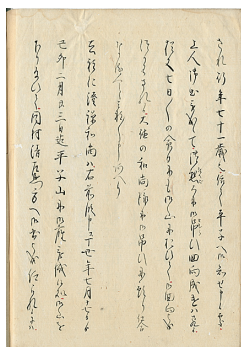
巻頭 01 オ



表表紙



裏表紙見返



巻尾 72 ウ